

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第428集

日 高 市

天神峯遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 6

埼 玉 県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では、「ゆとりとチャンスの埼玉」を目指すべき将来像に掲げ、さまざまな政策に取り組んでいます。

なかでも、県土の骨格となる道路を整備・活用することは、本県の潜在能力を余すことなく発揮させ、生活の利便性を向上させるとともに、産業振興をより一層促進し、埼玉県の活力を高めることにつながります。

県民の生活や経済に欠くことのできない道路などの社会基盤は、次世代に引き継ぐべき県民共有の財産であり、必要な整備や効率的な維持管理が行われています。県道飯能寄居線を対象とした地方特定道路（改築）整備工事及び社会資本整備総合交付金（改築）工事も、埼玉の成長を支える社会基盤整備の一つです。

さて、県道飯能寄居線の建設予定地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しております。今回発掘調査を行った天神峯遺跡もその一つです。発掘調査は、同事業に伴う事前調査であり、埼玉県の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代と平安時代の集落跡、近世の炭焼き窯跡などが見つかりました。縄文時代では県内でも類例の少ない早期末の尖底土器、平安時代では底面に「賀厨」と墨書きされた灰釉陶器碗など、特筆すべき遺物が出土しています。いずれも地域の歴史・文化を知るうえで、たいへん貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県飯能県土整備事務所、日高市教育委員会、並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成28年12月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 塩 野 谷 孝 志

例 言

1. 本書は、埼玉県日高市に所在する天神峯遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

天神峯遺跡（第1次調査）

日高市大字北平沢字上岡1258他

平成26年5月30日付け教生文第2-10号

天神峯遺跡（第2次調査）

日高市大字北平沢字峯1308他

平成27年4月2日付け教生文第2-5号

3. 発掘調査は、地方特定道路（改築）整備工事及び社会資本整備総合交付金（改築）工事に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業

平成26年度

「地方特定道路（改築）整備工事（北平沢工区・天神峯遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託）」

平成27年度

「社会資本整備総合交付金（改築）工事（天神峯遺跡発掘調査業務委託）」

整理・報告書作成事業

平成28年度

「社会資本整備総合交付金（改築）工事（天神峯遺跡埋蔵文化財調査報告書作成業務委託）」

5. 発掘調査及び整理・報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、第1次調査を上野真由美・松浦誠が担当し、平成26年5月1日から7月31日まで実施した。第2次調査を山本嶺・香川将慶が担当し、平成27年4月1日から7月31日まで実施した。

整理・報告書作成事業は、平成28年6月1日から10月31日まで実施し宮村誠二が担当した。平成28年12月22日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第428集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、株式会社中央測量設計に委託した。

空中写真撮影は、第1次調査を中央航業株式会社、第2次調査を株式会社東京航業研究所に委託した。

7. 出土炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
8. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は宮村が行った。
9. 出土品の整理・図版作成は宮村が行い、金子直行・細田勝・西井幸雄の協力を得た。
10. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、縄文時代の遺物を金子・細田、他は宮村が行った。
11. 本書の編集は宮村が行った。
12. 本書にかかる諸資料は、平成29年1月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
13. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の方々・機関から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）
加藤恭朗 中平薫 早川修司 松本尚也
日高市教育委員会

凡 例

1. 天神峯遺跡におけるX・Yの数値は、世界測地系国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

第1次調査のC-5グリッド北西杭の座標は、
X=-9400.000m、Y=-46100.000m。北緯35°
54' 51" 0787、東経139° 19' 21" 1613である。

第2次調査のD-2グリッド北西杭の座標は、
X=-9130.000m、Y=-46290.000m。北緯35°
54' 59" 8070、東経139° 19' 13" 5263である。

2. 調査の際に使用したグリッドは、第1次調査・第2次調査とも国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、調査時毎に付した。いずれも北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばC-2グリッドとした。

4. 本書で用いた遺構の略号は、以下のとおりである。

SC：集石土壌 SD：溝跡 SJ：住居跡
SK：土壌 SP：竈穴 P：ピット

5. 本書における挿図は、以下の縮尺を原則とした。例外については図中に縮尺を明示した。

遺構図

集石土壌・土壌（遺物出土状況） 1：30

住居跡・竈穴・土壌・焼土跡・炭焼窯跡 1：60

溝跡 1：60 1：120

調査区全体図 1：300

遺物実測図

土器 1：4

縄文土器・近世陶磁器・石器・石製品 1：3

石器（一部） 2：3

鉄製品 1：2

6. 遺構図・遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

焼土：網かけ（20%）

須恵器：断面黒塗り

灰釉陶器：施釉範囲を網かけ（20%）

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。

8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・器種は土師器・須恵器・灰釉陶器・ロクロ土師器・陶器・磁器・土製品と表記した。

・計測値の単位は大きさがcm、重量がgである。

・土器・陶磁器類の計測値のうち、口径および底径の（ ）内数値は復元推定値、器高の[]内数値は残存高である。

・胎土は特徴的な鉈物について記号で示した。鉈物名と記号の対応は以下のとおりである。

A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石

E：石英 F：軽石 G：砂粒子

H：赤色粒子 I：白色粒子 J：針状物質

K：黒色粒子 L：その他

・焼成は良好・普通・不良の3段階で示した。

・色調は自然光の下で観察し、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2006年版の土色名に準拠して表記した。

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50000地形図（川越）、日高市発行の日高市現況図（2）1/2500を編集・使用した。

目 次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理報告書作成	2
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3
II 遺跡の立地と環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	5
III 遺跡の概要	11
IV 第1次調査の遺構と遺物	19
1. 縄文時代	19
(1) 住居跡	19
(2) 集石土壌	23
(3) 土壌	24
(4) グリッド出土遺物	29
2. 平安時代	33
(1) 住居跡	33
(2) 焼土跡	40
3. 近世	41

(1) 土壌	41
(2) 溝跡	41
V 第2次調査の遺構と遺物	47
1. 縄文時代	47
(1) 住居跡	47
(2) 竪穴	48
(3) 土壌	48
(4) 包含層	52
(5) グリッド出土遺物	54
2. 平安時代	56
(1) 住居跡	56
3. 近世	58
(1) 土壌	58
(2) 溝跡	65
(3) 炭焼窯跡	67
(4) グリッド出土遺物	69
VI 自然科学分析	71
1. 放射性炭素年代測定	71
2. 樹種同定	74
VII 調査のまとめ	77

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	4
第2図 周辺の遺跡（縄文時代以前）	6
第3図 周辺の遺跡（弥生時代以降）	8
第4図 天神峯遺跡調査区位置図	12
第5図 天神峯遺跡調査区全体図	13
第6図 第1次調査区全体図（1）	14
第7図 第1次調査区全体図（2）	15
第8図 第2次調査A区全体図	16

第9図 第2次調査B区全体図	17
第10図 基本土層	18
〈第1次調査〉	
第11図 第3号住居跡	19
第12図 第3号住居跡出土遺物	20
第13図 第4号住居跡	21
第14図 第4号住居跡出土遺物	22
第15図 第1号集石土壌・出土遺物	24

第16図	土壌	25	第40図	土壌 (2)	50
第17図	第5号土壌遺物出土状況	25	第41図	土壌出土遺物	50
第18図	第5号土壌出土遺物	26	第42図	土壌 (3)	51
第19図	第16号土壌遺物出土状況	28	第43図	包含層	52
第20図	土壌出土遺物	28	第44図	包含層出土遺物	53
第21図	グリッド出土遺物 (1)	30	第45図	グリッド出土遺物	55
第22図	グリッド出土遺物 (2)	31	第46図	第1号住居跡	56
第23図	第1号住居跡	34	第47図	第1号住居跡出土遺物	57
第24図	第1号住居跡遺物出土状況	35	第48図	土壌 (1)	59
第25図	第1号住居跡出土遺物	36	第49図	土壌 (2)	60
第26図	第2号住居跡	37	第50図	土壌 (3)	61
第27図	第2号住居跡出土遺物	37	第51図	土壌 (4)	62
第28図	第5号住居跡	38	第52図	土壌 (5)	63
第29図	第1～5号焼土跡	39	第53図	土壌 (6)	64
第30図	第4号焼土跡出土遺物	40	第54図	土壌出土遺物 (1)	66
第31図	土壌	42	第55図	土壌出土遺物 (2)	67
第32図	溝跡 (1)	43	第56図	溝跡 (1)	68
第33図	溝跡 (2)	44	第57図	溝跡 (2)	69
第34図	溝跡 (3)	45	第58図	第1号炭焼窯跡	69
第35図	溝跡 (4)	46	第59図	グリッド出土遺物	70
〈第2次調査〉			第60図	暦年較正年代グラフ	73
第36図	第2号住居跡	47	第61図	出土炭化材の走査型 電子顕微鏡写真	75
第37図	第2号住居跡出土遺物	48	第62図	武蔵国出土の「厨」墨書土器	78
第38図	ガク穴	49			
第39図	土壌 (1)	49			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡	9	第9表	第4号焼土跡出土遺物観察表	40
〈第1次調査〉			第10表	土壌一覧表	41
第2表	第3号住居跡出土石器観察表	20	第11表	溝跡一覧表	46
第3表	第4号住居跡出土石器観察表	23	〈第2次調査〉		
第4表	第5号土壌出土石器観察表	26	第12表	第2号住居跡出土石器観察表	48
第5表	第16号土壌出土石器観察表	28	第13表	第1号住居跡出土遺物観察表	57
第6表	グリッド出土石器観察表	32	第14表	土壌一覧表	64・65
第7表	第1号住居跡出土遺物観察表	35	第15表	土壌出土遺物観察表	67
第8表	第2号住居跡出土遺物観察表	37	第16表	土壌出土鉄製品観察表	67

第17表	溝跡一覧表	69
第18表	グリッド出土遺物観察表	70
第19表	測定試料および処理	71
第20表	放射性炭素年代測定	

	および暦年校正の結果	72
第21表	樹種同定結果	74
第22表	武蔵国出土の主な「厨」	
	墨書土器一覧表	78

写真図版目次

図版1	1 天神塚遺跡遠景 南から
	2 第1次調査区近景
図版2	1 第2次調査区近景 (A・B区合成)
	2 調査区近景 (第1・2次調査区合成)
(第1次調査)	
図版3	1 第3号住居跡
	2 第4号住居跡
図版4	1・2 第4号住居跡炉跡 (1)・(2)
	3 第1号集石土壇
	4 第1号集石土壇完掘状況
	5 第5号土壇
	6～8 第5号土壇遺物出土状況
	(1)～(3)
図版5	1 第8号土壇
	2 第10号土壇
	3 第13号土壇
	4 第16号土壇
	5～8 第16号土壇遺物出土状況
	(1)～(4)
図版6	1 第1号住居跡
	2～5 第1号住居跡遺物出土状況
	(1)～(4)
図版7	1 第2号住居跡
	2 第4号焼土跡
	3・4 第4号焼土跡遺物出土状況
	(1)・(2)
	5 第5号焼土跡
図版8	1 第1・2号土壇
	2 第3号土壇
	3 第4号土壇

	4 第6号土壇
	5 第7号土壇
	6 第11号土壇
	7 第12号土壇
	8 第14・15号土壇
図版9	1 第1号溝跡
	2 第2・3号溝跡
	3 第8・10・11号溝跡
	4 第8・11号溝跡
	5 第9号溝跡
	6 第12号溝跡
	7 第13号溝跡
	8 第14号溝跡
図版10	1・2 第4号住居跡出土遺物
	3 第5号土壇出土遺物
	4 第3号住居跡出土遺物
図版11	1 第4号住居跡出土遺物
	2 第1号集石土壇出土遺物
図版12	1 第5号土壇出土遺物
	2 第8・10・13号土壇出土遺物
図版13	1 第16号土壇出土遺物
	2 グリッド出土遺物 (1)
図版14	1 グリッド出土遺物 (2)
	2 グリッド出土遺物 (3)
図版15	1・2 第3号住居跡出土遺物
	3～9 第4号住居跡出土遺物
	10・11 第5号土壇出土遺物
	12 第16号土壇出土遺物
	13～15 グリッド出土遺物
図版16	1～7 グリッド出土遺物

	8	第1号住居跡出土遺物	3	第33号土壌
図版17	1～6	第1号住居跡出土遺物	4	第50号土壌
	7・8	第2号住居跡出土遺物	5	第51号土壌
	9・10	第4号焼土跡出土遺物	6	第56号土壌
〈第2次調査〉				
図版18	1	第2号住居跡	7	第1号炭焼窯跡
	2	第2号住居跡遺物出土状況	図版23	1 第1号炭焼窯跡検出状況
図版19	1	第1号炉穴完掘	2	第1号炭焼窯跡焼成面
	2	第1号炉穴	3	第1号溝跡
	3	第2号炉穴	4	第2号溝跡
	4	第3号炉穴	5	第3号溝跡
	5	第1号土壌	6	第4号溝跡
	6	第36号土壌	図版24	1 第2号住居跡出土遺物
	7	第37号土壌	2	第1・39・45号土壌出土遺物
	8	第39号土壌	図版25	1 包含層出土遺物
図版20	1	第45号土壌	2	グリッド出土遺物（1）
	2	第46号土壌	図版26	1 グリッド出土遺物（2）
	3	第47号土壌	2・3	第2号住居跡出土遺物
	4	第48号土壌	4～7	第1号住居跡出土遺物
	5	包含層	図版27	1・2 第1号住居跡出土遺物
図版21	1	第1号住居跡	3	第56号土壌出土遺物
	2	第1号住居跡カマド2	4	第51号土壌出土遺物
	3	第1号住居跡カマド1	5	第33号土壌出土遺物
	4・5	第1号住居跡遺物出土状況 （1）・（2）	6	第43・46・48号土壌出土遺物
図版22	1	第29号土壌	図版28	1 第29・31・33・50・51・58号 土壌出土遺物
	2	第31号土壌	2	グリッド出土遺物
			3	グリッド出土遺物

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、平成24年度から平成28年度の第5か年計画「埼玉県5か年計画—安心・成長・自立自尊の埼玉へ—」において「埼玉県の成長を支える社会基盤を作る」という基本目標を掲げ、その一環として地域の生活を支える身近な道路の整備を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、これらの施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県道飯能寄居線整備事業にかかる埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、平成24年11月29日付け飯整第1509号で、飯能県土整備事務所長より生涯学習文化財課長あて、埋蔵文化財の所在及び取扱いについての照会があった。

これに対し、生涯学習文化財課では試掘による確認調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認した。この結果をもとに、平成26年4月1日付け教生文第261号で、次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が存在します。

名称	種別	時代	所在地
天神峯遺跡 (No.29-080)	集落跡	縄文・奈良・平安時代	日高市大字北平沢地内

2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が

所在します。包蔵地内で工事着手する場合は、工事に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

「発掘調査を要する区域」については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

飯能県土整備事務所と生涯学習文化財課は、埋蔵文化財の保存について協議を重ねたが、現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることとなり、そのための発掘調査は公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託することになった。

その後、文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、記録保存のための発掘調査を実施するよう埼玉県教育委員会教育長から勧告した。文書番号は平成26年4月1日付け教生文第4-73号である。

また第92条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの通知番号は、平成26年5月30日付け教生文第2-10号（第1次調査）、平成27年4月2日付け教生文第2-5号（第2次調査）である。

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

天神峯遺跡の発掘調査は、地方特定道路(改築)整備工事及び社会資本整備総合交付金(改築)工事に先立ち、平成26年度(第1次調査)と平成27年度(第2次調査)に実施した。調査面積は6297.04㎡である。内訳は第1次調査が3,540㎡、第2次調査が2,757.04㎡である。

平成26年度(第1次調査)

第1次調査は、平成26年5月1日から7月31日まで実施した。4月22日に発掘調査届提出等の事務手続きを行い、5月1日～2日に囲柵設置と碎石敷設工事を行った。5月7日に発掘事務所を設置し、5月9日に発掘器材を搬入した。5月7日から5月26日まで重機による表土掘削を実施した。5月13日から補助員作業を開始し、遺構確認作業の後、各遺構の調査に着手した。

5月26日に基準点測量委託作業を行い、その後、実測図と写真による記録の作成を開始した。7月3日には空中写真撮影を実施した。

7月16日に発掘作業は終了し、発掘器材の搬出、発掘事務所の撤去を実施した。実績報告書の作成と発見届・保管証提出等の事務処理を行い、7月31日に完了した。

平成27年度(第2次調査)

第2次調査は、平成27年4月1日から7月31日まで実施した。

4月1日に、発掘調査届提出等の事務手続きを行った。4月6日～9日に囲柵設置工事を、4月7日に碎石敷設工事を実施した。4月9日に発掘事務所を設置し、4月13日に発掘器材を搬入した。

4月9日～16日にA区、4月17日～5月1日にB区の表土掘削を行った。4月20日から補助員作業を開始した。A区・B区の順に、遺構確認作業を開始し、その後、各遺構の調査に着手した。

4月23日にA区、5月18日にB区の基準点測量

委託作業を行い、その後、実測図と写真等の記録の作成を開始した。7月2日には空中写真撮影を実施した。

7月16日に補助員作業は終了した。発掘器材の搬出・発掘事務所の撤去後、実績報告書の作成と発見届・保管証提出等の事務処理を行い、7月31日に完了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成事業は、平成28年6月1日から10月31日まで実施した。

遺物は、水洗・註記作業後、接合を行った。接合した遺物は、実測図を作成した。一部の遺物実測に遺物実測機を使用した。作成した実測図は製図ペンでトレースを行い、必要に応じて拓本を採った。これらはスキャナを使用してデジタルデータ化し、レイアウト編集して印刷用の挿図版下データを作成した。また、遺物の写真を撮影し、写真図版の版下データを編集・作成した。

遺構は、発掘調査で作成された平面図・土層断面図等を修正・編集して第二原図を作成した。第二原図は、パソコンを使用してデジタルトレースと編集作業を行い、印刷用の挿図版下データを作成した。遺構写真は、写真図版に使用するものを選び出し、版下データを作成した。

自然科学分析委託は、8月2日に試料を採取し、成果は9月29日に納品された。

作成した遺構・遺物のデータ及び自然科学分析成果等をもとに報文を執筆し、遺構・遺物の挿図と写真図版などを組み合わせて割付を作成した。完了後、印刷業者に入稿し、3回の校正を経て、平成28年12月下旬に報告書を刊行した。

図面類・写真類・遺物・データ類等の諸資料は、10月末に整理・分類の上、埼玉県文化財収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成26年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男	調査部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之	主幹兼調査第二課長	木 戸 春 夫
総 務 課 長	藤 倉 英 明	主 査	上 野 真由美
		主 事	松 浦 誠

平成27年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男	調査部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
総務部		調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之	主幹兼調査第二課長	田 中 広 明
総 務 課 長	安 田 孝 行	主 査	山 本 禎 慶
		主 事	香 川 将 慶

平成28年度（整理・報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
総務部		調 査 部 副 部 長	細 田 勝 勝
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	主幹兼整理第二課長	山 本 靖 二
総 務 課 長	曾 川 浩 二	主 事	宮 村 誠 二

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

天神峯遺跡は、埼玉県日高市大字北平沢に所在し、市のほぼ中央を南北に通るＪＲ八高線高麗川駅から北西約2.5kmに位置している。

遺跡が所在する日高市は、埼玉県の南西部、関東山地と関東平野の境界付近に位置する。東は川越市・狭山市、西は飯能市・入間郡毛呂山町、南は飯能市、北は坂戸市・鶴ヶ島市に接する。

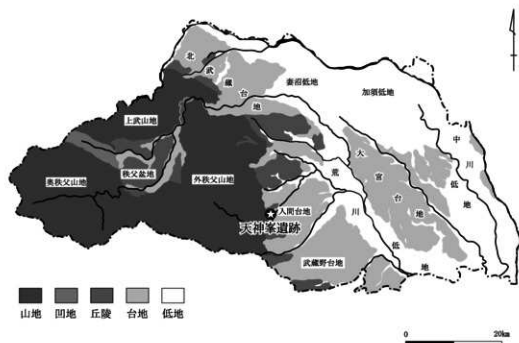
市域では、市中央部を南北に走る八王子構造線を地形境として、西側に外秩父山地の東縁が広がる。そこから舌状に張り出す毛呂山丘陵と高麗丘陵が市の南北を画す格好となっている。八王子構造線以东には台地が広がり、市の南東部では入間台地の西端が南東方向に発達している。

また、市中央部の台地上では、関東山地と関東平野の境を北流する高麗川が大きく蛇行して造り出す景勝地「巾着田」付近を扇頂部として、市域

南縁に横たわる高麗丘陵との間に扇状地が形成されている。扇頂部の標高は約100mで、扇央部とは50mの比高差がある。扇状地は開析が進まなかったため、平坦な地形上に小河川は見られない。

一方、扇状地の南側では、小畔川や下小畔川・第二小畔川・南小畔川などの小河川が高麗丘陵や入間台地西端を開析している。河川は緩やかな勾配で南西から北東へ流下し、幅の狭い浅い谷が形成されている。この谷部には谷津田が営まれ、市内における重要な水田地帯となっている。

なお、日高市域では、大半の遺跡が高麗川流域とその扇状地の南側を流れる小河川沿いに分布する。天神峯遺跡は、遺跡が少ない日高市北部の高麗川左岸、毛呂山丘陵南端の緩斜面に立地する。北側には、高麗川支流の宿谷川が東流している。



第1図 埼玉県の地形

2. 歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、飯能台地から坂戸台地にかけて分布し、丘陵部や山地には少ない。遺跡は日高市下向山遺跡（48）・向山遺跡（49）のほか、鶴ヶ島市横田遺跡・柳戸遺跡、狭山市西久保遺跡などが知られている。

横田遺跡では、細石核11点、細石刃174点、槍先形尖頭器72点、ナイフ形石器16点が発見された。西久保遺跡では、石器集中7箇所から約2200点の石器が出土した。両遺跡とも、遺物の多さから考えて、旧石器時代人のベースキャンプの可能性が指摘されている。一方、下向山遺跡・向山遺跡では少量の石器が出土しただけで、狩猟等の関わる一時的なキャンプ跡であったと考えられる。特に下向山遺跡の小規模な石器集中は、狩猟活動に先がけての石器装備のメンテナンス等に関わる可能性が指摘されている。（栗島1998）。

縄文時代

縄文時代草創期や早期の遺跡も、旧石器時代と同様に数は多くない。草創期から早期前半には遺跡数がきわめて少ないが、早期中葉から後半期にかけて徐々に増えてくるようである。向山遺跡では早期の集落が調査され、毛呂山町下中尾遺跡（4）や六本松B遺跡（2）でも早期の遺物が発見された。

前期は、日高市の上野ヶ谷戸遺跡（25）や愛宕久保遺跡（24）で関山式土器が出土しているが、未だ遺跡数は少ない。

この地域で遺跡数が増えてくるのは、前期中頃に至ってのことである。

前期中頃の関東地方では、黒浜式土器が広く普及した。この黒浜式に続く諸磯式前半期には日陰山遺跡や宿遺跡などがある。

毛呂山町金谷遺跡（1）から諸磯c式土器が出土し、狭山市八木上遺跡では十三菩提式期の住居

跡や土壌が、隣接する金井上遺跡からも土壌が発見されている。

前期の終わり頃から前期中半には再び遺跡数が減少するが、前期中頃になると遺跡数は急激に増加する。

天神峯遺跡の北方に位置する毛呂山町の新田東遺跡（5）や日高市の国指定史跡高麗石器時代住居跡遺跡（26）・宿東遺跡（37）などが前期中頃から後半の遺跡として挙げられる。

新田東遺跡では数多くの竪穴住居跡が検出され、毛呂山丘陵から張り出した尾根上に営まれた環状集落の存在が明らかになっている。出土した遺物から、前期中頃から後半に営まれた拠点的な集落と考えられている（上野・細田2011）。

新田東遺跡の近辺には、中期の包蔵地である山ノ神遺跡（6）や同時期の遺跡と想定される大寺遺跡（8）・三角南遺跡（7）などがある。いずれも詳細は不明であるが、新田東遺跡との密接な関係が予想される。

国指定史跡高麗石器時代住居跡遺跡は、埼玉県で初めて竪穴住居跡が調査された遺跡として著名である。その後、2次にわたり調査が実施され、前期中頃を中心とする環状集落であることが明らかになっている（細田2013）。

宿東遺跡では160軒の住居跡が調査された。中期の終わり頃を中心とした大集落跡である（細田・渡辺1998）。

後期以降は遺跡数が極端に少なくなる。日高市寺脇遺跡（36）では7軒の住居跡が調査され、中期終わりから後期初めの集落と判明した。また、毛呂山町東原遺跡（3）からは、晩期後半の千網式土器が出土している。

弥生・古墳時代

弥生時代から古墳時代の遺跡数は、極端に少ない。



第2図 周辺の遺跡 (縄文時代以前)

弥生時代の遺跡としては、毛呂山町の西ヶ谷北遺跡(15)・まます遺跡(16)・下中尾遺跡(4)・中在家遺跡などが知られている。

西ヶ谷北遺跡・まます遺跡では、住居跡が検出されている。下中尾遺跡では弥生時代後期の吉ヶ谷式土器、中在家遺跡でも弥生時代後期の土器が出土している。

古墳時代前期は、毛呂山町の堂山下遺跡や松の外遺跡(11)・まます遺跡があり、いずれも住居跡が検出されている。また、日高市の和田遺跡(53)でも前期から中期にかけての遺物が多量に出土し、大規模な集落の存在が推測されている。和田遺跡は、日高市内で唯一の古墳時代の遺跡である。

古墳時代中期では、毛呂山町の矢島遺跡(20)から16軒の住居跡が検出されている。当該地域では中期の集落遺跡の調査例が少なく、前期と後期をつなぐ重要な遺跡である。

古墳時代後期の遺跡も調査例が少ないが、毛呂山町の久根下遺跡(9)や上殿遺跡(21)・常楽寺跡で住居跡が確認されている。

久根下遺跡は西戸古墳群(10)の至近にあり、造墓集団と墓域を考える上で重要な遺跡である。西戸古墳群は越辺川の左岸に所在し、松の外遺跡と複合している。古墳の横穴式石室には、凝灰質砂岩の切石を用いるものと河原石積みのものが併存する。また、箱式石棺墓も確認され、多様性が見られる。

越辺川右岸には、大類古墳群(14)や川角古墳群(12)がある。大類古墳群は小規模な前方後円墳2基と円墳40基からなる古墳群で、埴輪が出土している。川角古墳群では円墳が42基確認されているが、埴輪を樹立した古墳は知られていない。なお、川角古墳群では中世陶器片が採集され、南北朝期の板碑が出土している。近くに中世墳墓が検出された崇徳寺跡があることから、墓域の一部として再利用された可能性が指摘されている。

このほか、鎌倉街道遺跡では切石を用いた主体

部をもつ古墳が検出され、8世紀初頭の須恵器が出土している。また、古墳跡が検出された宿浦遺跡(13)は大類古墳群と川角古墳群の間に位置し、地域の古墳群形成を考える上でも注目される。

奈良・平安時代

奈良時代、「続日本紀」霊龜二年(716)五月十六日条には、日高市と飯能市にまたがる地域に高麗郡が建郡されたことが記されている。

高麗郡建郡は、当地域における古代史上の最も重要な出来事である。高麗郡建郡以降、遺跡の分布が希薄であった小畔川流域を中心に遺跡数が爆発的に増加する。中でも小畔川上流域の高萩地区には高麗郡家に推定される遺跡が存在し、高麗郡の中核といえる地域である。

小畔川の左岸には、8世紀から9世紀にかけて拾石遺跡(62)や王神遺跡(61)・道光林遺跡(60)・新宿遺跡(64)などが形成される。

拾石遺跡では、住居跡46軒・掘立柱建物跡6棟・井戸跡14基・土壇4基・道路跡1条・水路跡2条などが確認されている。

王神遺跡では、住居跡8軒・掘立柱建物跡1棟・井戸跡3基・土壇2基・道路跡1条・水路跡1条が確認されている。道路遺構と水路遺構は、東隣の拾石遺跡で検出されたものと一連の遺構である可能性が指摘されている(松本1997)。

拾石遺跡では、石製の丸磨や巡方、耳皿・漆紙・墨書土器などが出土している。墨書土器には「家長」や「南家」と記されたものが知られていたが、最近、「厨」墨書土器が確認され、注目を集めた。また、王神遺跡から出土した鳥形硯蓋は、埼玉県内の窯跡では生産が確認されておらず、搬入品と考えられている(宮原2016)。

拾石・王神両遺跡では古代の役所の存在を思わせる遺物が出土し、銅製の巡方を出土した小畔川右岸の堀ノ内遺跡(63)も含め、高麗郡家の有力な候補地とされている(平野2016)。

道光林遺跡では8世紀前半の住居跡3軒、新宿



第3図 周辺の遺跡(弥生時代以降)

第1表 周辺の遺跡

番号	市町村	遺跡名	時代
1	毛呂山町	金谷	縄(前)
2		六本松B	縄(早)
3		東原	奈・平
4		下中尾	縄(早・前・中)・弥
5		新田東	縄(中)・近
6		山ノ神	縄(前・中)
7		三角南	縄(早・中)
8		大寺	縄(中)
9		久根下	縄・古・平
10		西戸古墳群	古
11		松の外	縄(前・後)・平
12		川角古墳群	古
13		宿浦	古
14		大類古墳群	古
15		西ヶ谷北	古
16		まます	縄(中)・平・中・近
17		築地	縄(中)・古・奈・平
18		伴六	旧・縄・平
19		中尾	奈・平
20		矢島	古
21		上殿	縄(中)・平
22	日高市	天神峯	縄(中)・奈
23		久保	縄(中)
24		愛宕久保	縄
25		上野ヶ谷戸	縄(中)
26		高麗石器時代住居跡	縄(中)
27		平谷	縄(中)
28		鹿台	縄(中)
29		榎戸	縄(後)
30		東原	縄(早・中・後・晩)
31		小竹	縄(中)
32		常木久保	縄(早)・奈・平
33		稲荷	縄・平

番号	市町村	遺跡名	時代
34	日高市	大日向	縄(中)
35		若宮	縄・奈・平
36		寺脇	縄(後)
37		宿東	縄(中・後)
38		宮ノ後	縄(中)
39		宮ノ後	縄・平・中
40		上猿ヶ谷戸	旧・縄(早)・奈・平
41		長山甲	縄(中)
42		西ノ久保	縄(中)
43		谷津	縄(中)
44		西仏	縄(中)
45		向原	縄(中・後)・平
46		宿方	縄(中)・平
47		二反田	縄(早・中・後)・平
48		下向山	旧・縄(早・中)・奈・平
49		向山	旧・縄(早)
50		上原	縄(中)・平
51		向原	縄(中)
52		大寺廃寺跡	奈・平
53		相田	縄・古
54		高岡寺院	奈・平
55		高岡窯跡群	奈・平
56		神明	平
57		宮ノ後	平
58		稲荷	縄(中)・平
59		稲荷	縄(中)・平
60		道光林	平
61		王神	平
62		拾石	縄(中)・平
63		堀ノ内	平
64		新宿	平
65		向谷	平
66		北ノ原	縄・平

遺跡でも8世紀中葉から9世紀後半の住居跡11軒が検出されている。

小畔川右岸には、堀ノ内遺跡や若宮遺跡(35)などが形成された。

堀ノ内遺跡では、9世紀代の住居跡10軒と土壇・溝跡などが発見された。若宮遺跡では、住居跡13軒・溝跡2条・土壇7基・井戸跡1基・道路遺構・建物跡などが見つっている。

小畔川の上流域には、常木久保遺跡(32)・稲荷遺跡(58)・神明遺跡(56)があり、8世紀第Ⅲ四半期～9世紀第Ⅳ四半期を中心とする住居跡54軒や井戸跡3基、道路遺構などが検出されている。ここでは多量の須恵器のほか、灰釉陶器や土師器などが出土している。

なお、高麗郡建郡以降における高萩地区を中心とした地域では、川越市光山遺跡や日高市上猿ヶ

谷戸遺跡(40)など建郡以前から人間郡西端に位置していた拠点集落が集落形成に関与した可能性が指摘されている(平野2016)。

高麗川流域には、一体をなすと見られるまます遺跡・築地遺跡(17)や、伴六遺跡(18)などが所在する。

まます遺跡では9世紀代の掘立柱建物跡8棟や住居跡7軒、溝跡1条などが調査され、「王」・「春」の墨書土器が出土している。

築地遺跡は9世紀から10世紀代が中心であり、大型の住居跡が確認されている。大量の墨書土器や石製丸簪・帯金具・相模型環が出土している。

伴六遺跡では20軒以上の住居跡や井戸跡が検出され、馬具などが出土している。

こうした集落遺跡のほか、高麗郡には女影廃寺・高岡寺院跡(54)・大寺廃寺跡(52)の3箇所の

古代寺院跡が確認されている。

若宮遺跡内に所在する女影庵寺は、当地域においていち早く建立された寺院である。創建は8世紀前半とされている。常陸国新治庵寺（新治郡の郡寺）と同一の型でつくられた軒丸瓦が発見されていることから、高麗郡の郡寺として建立された可能性が指摘されている。女影庵寺は、10世紀前半に終末を迎えたようである。

高岡寺院跡は、出土遺物から8世紀中頃に造営が開始されたと考えられている。高麗氏系図にみられる「天平勝宝三歳（751）辛卯僧勝樂寂弘仁与其弟子聖雲同納遺骨一字草創云勝樂寺」の年代が創建時期と合致することから、僧勝樂の菩提寺と推定されている。

大寺庵寺跡は、平安時代に栄えた寺院跡である。8世紀前半の複弁八葉軒丸瓦が創建瓦とされているが、現在までに、対応する軒平瓦が確認されていないことや、遺跡内に8世紀中頃から後半にかけての集落跡が検出されていることから、これを以て創建年代とする考えには懐疑的な意見（埜間1997）もある。

大寺庵寺跡の北東約1kmには、8世紀後半及び9世紀中葉の集落跡である中尾遺跡（19）と東原遺跡（3）が位置している。

両遺跡は、集落の成立時期と集落廃絶後の再形成の時期が、大寺庵寺の造営及び伽藍整備を伴う

本格的瓦葺き寺院化の時期と対応する。そこで、寺院の創建と瓦葺き寺院の整備に携った人々の居住地であった可能性が指摘されている。両遺跡とも入間郡毛呂山町に所在するが、大寺庵寺を高麗氏の氏寺と推定すると、高麗郡に属したムラであったとする考えも示されている（劍持2011）。

近世以降

天神峯遺跡では近世の炭焼窯跡が発見されている。日高市域では、江戸時代を通じて、農業が村々の生産・生業の中心であった。一方、江戸時代の中頃から末期にかけては農閑余業として山間の村々において薪炭の生産が盛んに行われていたことも知られている。江戸時代以降の記録では埼玉県域の炭焼窯が山地を中心に展開し、天神峯遺跡の立地とも通じている。

明治8年（1875）以前の様子を記した『武蔵国郡村誌』には、天神峯遺跡が所在する平沢村（上組・中組・下組）では民業が「男女農桑を専とす」とあり、物産についても薪炭生産に関する記述はない。一方、北隣の入間郡葛貫村では、民業として「男は農業焼炭を専とし女は耕織を専とす」とあり、物産としても「炭」の記載がある（埼玉県1954a・1954b）。近隣で薪炭生産が盛んに行われていたことが窺え、天神峯遺跡でも小規模な薪炭生産が行われていたことが想定される。

III 遺跡の概要

天神峯遺跡は、日高市大字北平沢地内に所在し、市域のほぼ中央を南北に貫くJR八高線高麗川駅から北西約2.5kmに位置する。高麗川の左岸、外秩父山地から続く毛呂山丘陵南端の緩斜面に立地し、標高は80～97mを測る。付近には、高麗氏ゆかりの高麗神社や聖天院・大寺庵寺跡などがある。

天神峯遺跡では、石鏃や土師器・須恵器が採取され、縄文時代中期と奈良時代の集落跡として、昭和53年12月20日に登録された。しかし、発掘調査は実施されておらず、詳細は不明であった。

天神峯遺跡の発掘調査は、地方特定道路(改築)整備工事及び社会資本整備総合交付金(改築)工事に先立ち、平成26年度と平成27年度に実施した。

遺跡の範囲は、東から西へ延びる尾根の北斜面から南斜面に及ぶ。平成26年度の第1次調査は、遺跡範囲の南端部を対象に実施した。平成27年度の第2次調査は、第1次調査区の北西0.2～0.3kmの丘陵頂部から北斜面にかかる部分を対象に実施した(第4・5図)。

第1次調査区は、丘陵の南斜面に位置する。遺構確認面の標高は、89～93mを測る。北隅が最も高く、南に向かって緩やかに傾斜している。勾配は南側ほどきつくなる。

第1次調査では、縄文時代や平安時代・近世の遺構・遺物が検出された(第6・7図)。大半の遺構が標高の高い調査区北寄りから検出された。調査区内では標高91m付近を境に、南側は遺構の分布が希薄で、検出された遺構は斜面下方が失われていた。後世の削平や土砂の流出によるものと推察され、本来は南側にも遺構が展開していたと見られる。

縄文時代の遺構は、住居跡2軒・集石土壌1基・土壌5基が検出された。第4号住居跡は、炉体に使用されていた黒浜式土器から、前期中頃の所産である。第3号住居跡からも黒浜式や諸磯式の土

器が出土し、前期の遺構と考えられる。

第5号土壌から出土した早期末の打越式期の尖底羽状縄文土器は、県内には類例が少なく特筆される。第5号土壌は、出土遺物やその出土状況から土壌墓の可能性も考えられる。

平安時代の遺構は、住居跡3軒と焼土跡5基が検出された。第1号住居跡からは、底部外面に「賀厨」の墨書を有する灰釉陶器碗が出土した。いわゆる「厨」墨書土器で、埼玉県内では10例が知られている。灰釉陶器の事例としては県内初出例であり、全国的にも類例は少ない。

近世の遺構は、土壌10基・溝跡15条が検出された。溝跡は、土地区画や排水のために掘削されたと考えられる。

第2次調査区はA区とB区の2箇所に分かれ、縄文時代や平安時代・近世の遺構・遺物が検出された(第8・9図)。

縄文時代の遺構は、住居跡1軒・炉穴3基・土壌9基が検出された。住居跡から前期後半の諸磯式土器や中期後半の加曽利E式土器などが出土し、中期後半と考えられる。土壌には、形態や規模、配置等から、落し穴の可能性があるものもある。

平安時代の遺構は、住居跡1軒が検出された。出土遺物は、第1次調査で検出された平安時代の住居跡よりも新しい様相を示す。

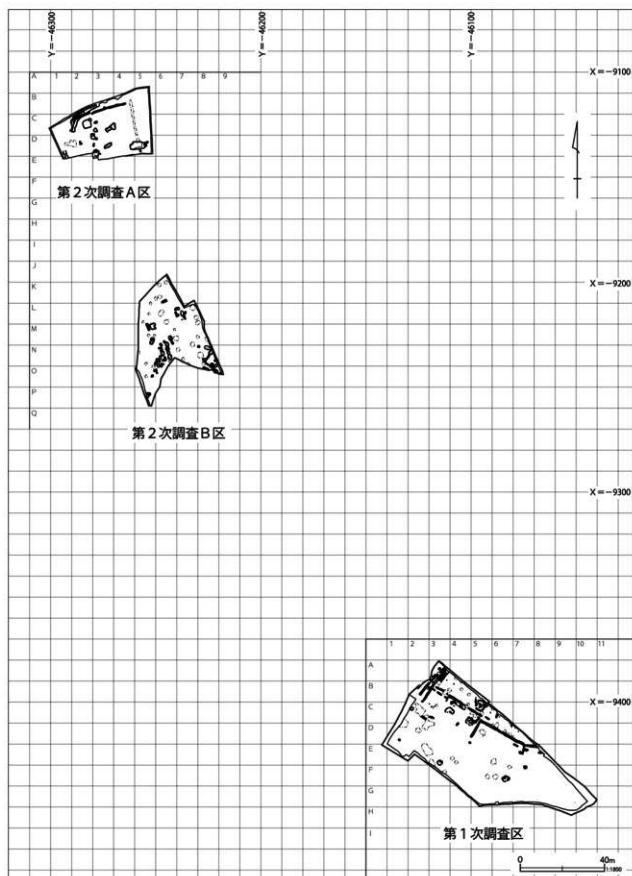
近世の遺構は、炭焼窯跡1基・溝跡4条・土壌49基である。炭焼窯跡は、記録が少なく不明な点が多い近世の当地域における薪炭生産を理解する上で、貴重な発見といえる。

基本順序は、第1次調査区北壁際にトレンチを掘削して確認した(第10図)。

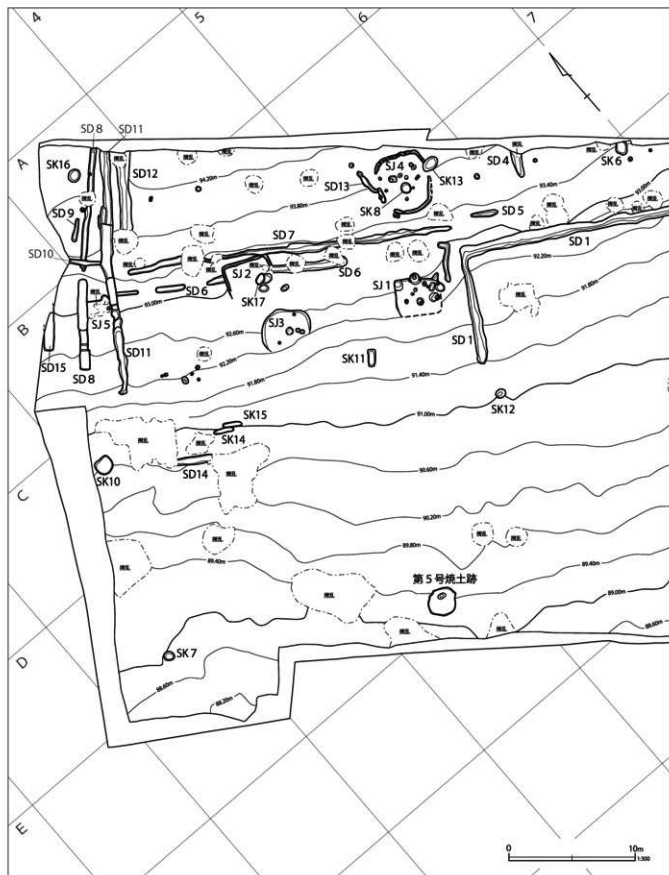
確認地点では、厚さ0.2～0.3mの表土直下にロームブロックやローム粒子を含む黒褐色土層(I層)があり、近世以降の堆積層と見られる。その



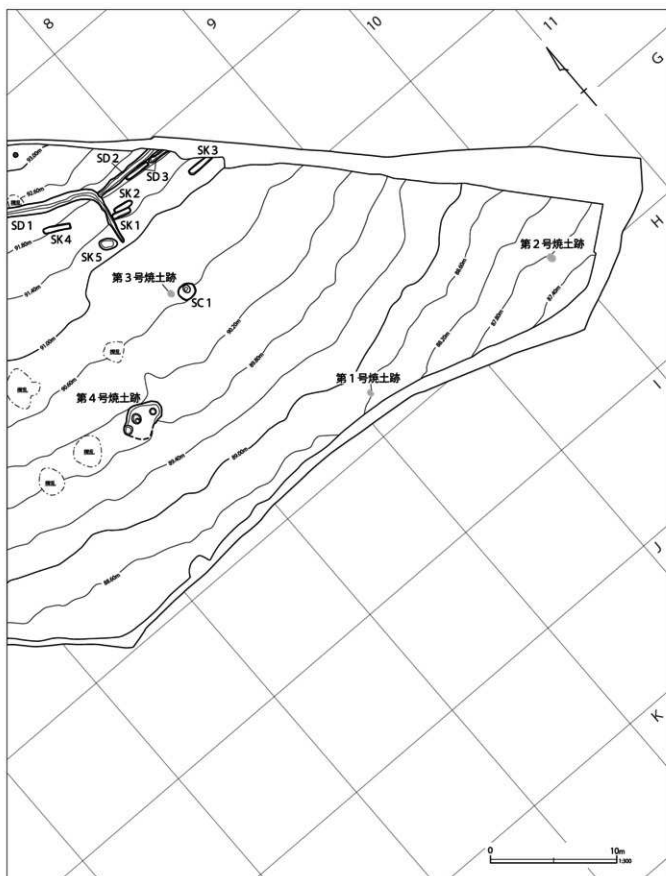
第4図 天神峯遺跡調査区位置図



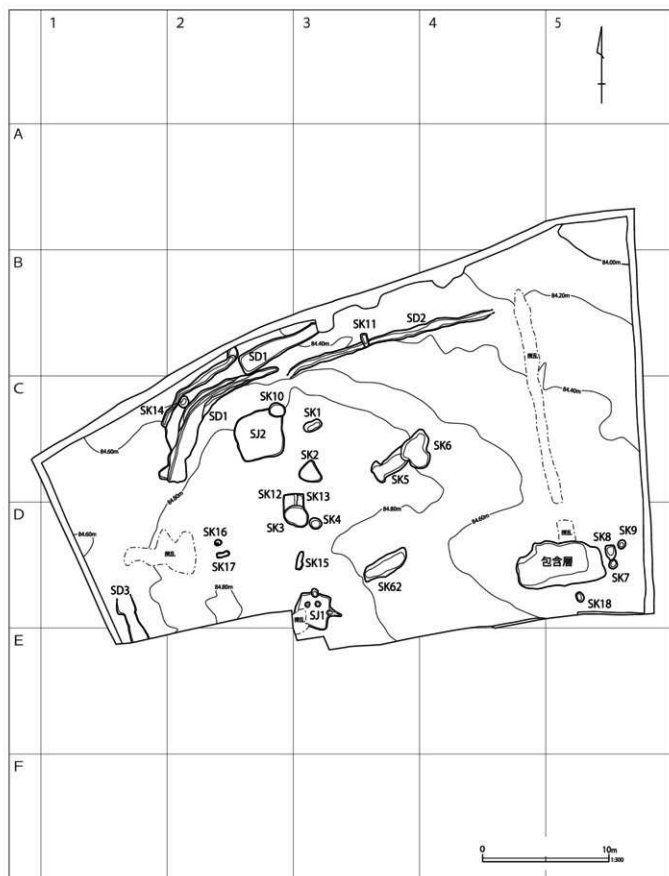
第5図 天神峯遺跡調査区全体図



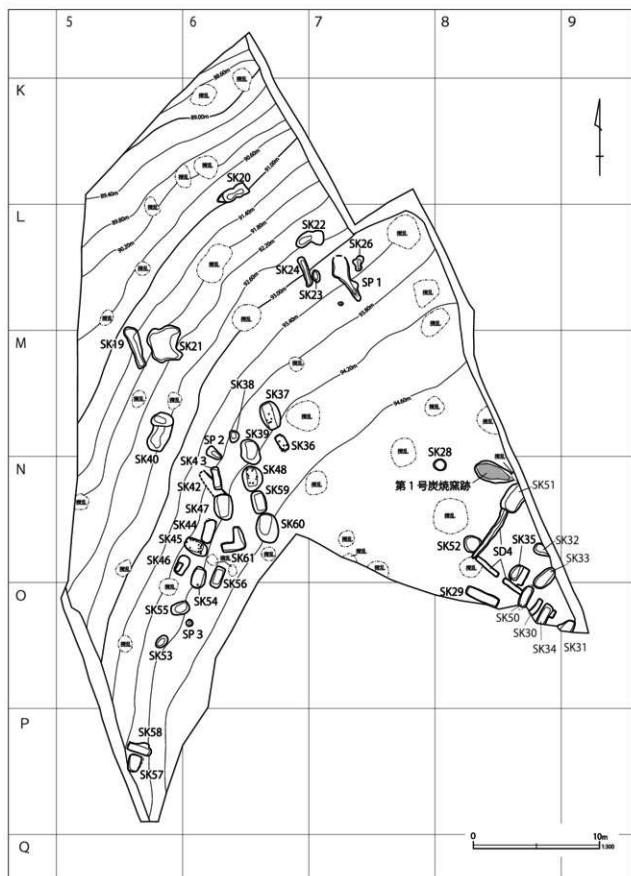
第6图 第1次调查区全体图(1)



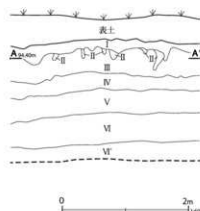
第7図 第1次調査区全体図(2)



第8図 第2次調査A区全体図



第9図 第2次調査B区全体図



第10図 基本土層

下にハードロームから成る黄褐色土層（Ⅲ～Ⅵ'層）が認められた。

ハードローム層最上層のⅢ層には、黄褐色のソフトローム（Ⅱ層）が入り込んでいる。黒色粒子と白色粒子が多量に含まれ、ガラス質の粒子や粒子状の赤色スコリアも含まれている。Ⅲ層は第1

基本土層		
I層	黒褐色土	ローム粒子多量 ロームブロック(1cm大)微量 近世以降
II層	黄褐色土	ソフトローム
III層	黄褐色土	ハードローム ガラス質の粒子入る 白色粒子多量
		黒色粒子多量 赤色スコリア(粒子状1mm以下)少量
		第1黒色帯
IV層	黄褐色土	(Ⅱ層より細かい) ハードローム 白色粒子少量 Ⅱ層のやや明るい土がシミ状に入る 赤色粒子少量(Ⅱ層と同様)
		第2黒色帯上層
V層	黄褐色土	(Ⅱ層と色調が同じ) ハードローム 上層に比較し2mm以下の粒子の赤色スコリアがまばらに入る 黒色粒子少量
		白色粒子はみられない 第2黒色帯下層
VI層	黄褐色土	ハードローム 色調はⅢ・Ⅳ層とはほとんど変わらない赤色スコリア微量(細粒)
VI'層	黄褐色土	V層と比較しソフト化した部分で分類した武蔵野ロームの最上層の可能性あり

黒色帯に相当すると見られる。

Ⅳ・Ⅴ層は、黒色粒子や白色粒子の含有量がⅢ層に比べて少ない。Ⅳ層は第2黒色帯の上層、Ⅴ層はその下層に比定できる。

Ⅵ'層は、武蔵野ローム層の最上層の可能性はある。

IV 第1次調査の遺構と遺物

1. 縄文時代

(1) 住居跡

第3号住居跡 (第11～12図)

調査区の中央やや北寄り、C-3・4グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は見られない。

後世の削平によって、南半部が失われていたが、平面形態は、残存部の形状から、隅丸長方形と推定される。

規模は、残存状態の良い東西軸で3.86mを測る。確認面からの深さは0.05～0.26mである。床面の標高は92.3m前後で、平坦である。

覆土は、上層に黒褐色土が堆積し、床面近くに暗褐色土の薄い堆積層が認められた。

住居跡の壁は床面から急角度で立ち上がる。

住居の中央付近に炉跡が認められた。炉跡は、

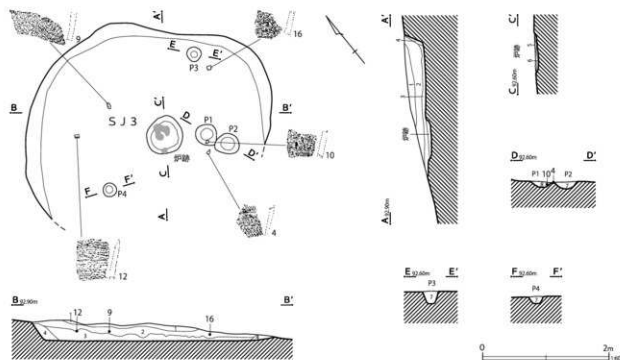
直径0.6m前後の楕円形で、深さ0.03mである。被熱状況から6層の上面が火床面と考えられる。

ピットは4基認められた。炉跡に近接するものや住居の壁際に位置するものがあり、配置に規則性は認められない。直径0.22～0.45mで、深さは0.08～0.19mである。明確な柱痕をもつものは確認できない。

遺物は、縄文土器や石器が出土した。土器は縄文時代早期から前期後半のものである。

1～2は条痕文系土器である。1は微隆起線でごく細い口唇部に、縦位に微隆起線が垂下している。繊維の含有は少ない。2は繊維を含み、内外面に条痕が施されている。

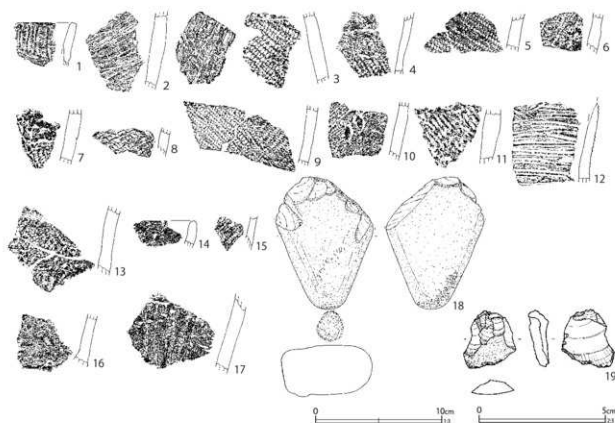
3～11は繊維を含む黒浜式土器である。3は半



- S J 3
- 1 黒褐色土 ローム粒子(粗)少量 炭化物・焼土粒子微量
 - 2 黒褐色土 ローム粒子(粗)多量 炭化物少量 焼土粒子・ロームブロック微量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1cm大)・炭化物少量 焼土粒子微量
 - 4 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量 ソフトローム含む

- 炉跡
- 5 暗褐色土 ローム粒子(粗)多量 焼土粒子・炭化物・焼土ブロック少量
 - 6 黄褐色土 焼土ブロック・ロームブロック多量 炉面方埋土
- P1～P4
- 7 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
 - 8 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物・焼土粒子・ロームブロック(1cm大)微量

第11図 第3号住居跡



第12図 第3号住居跡出土遺物

第2表 第3号住居跡出土石器観察表 (第12図)

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	図版
18	敲石	砂岩	10.5	[7.7]	4.3	421.5		15-1
19	スクレイパー	黒曜石	2.2	2.1	0.8	2.6		15-2

截竹管文により器面が区画されている。4・5・7は地文のみの破片で、4・5・7がRL、6・8・10・11がLR、9はRLとLRの原体による羽状縄文が施文されている。

12～15は諸磯式と考えられる破片で、12は半截竹管により横位の沈線文が密に施文されている。

13・15は縄文のみの施文である。14は無文だが、胎土や整形からこの時期と判断した。

16・17は中期後半の土器と推定される。16は底部近くの破片、17は櫛歯状工具による浅い条線が垂下している。

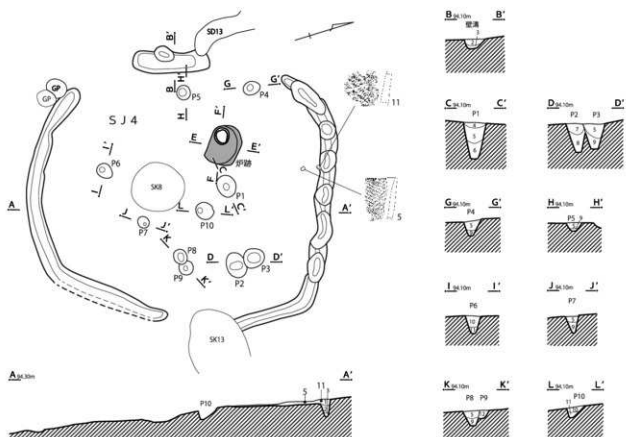
18・19は石器である。18は敲石、19は黒曜石製のスクレイパーである。

第4号住居跡 (第13～14図)

調査区中央北寄り、B・C-5グリッドに位置する。重複する第8・13号土壌、第13号溝跡は、第4号住居跡よりも新しい。住居跡は削平され、斜面下方は床面がほとんど失われていたため、第8号土壌との新旧関係は不明である。

床面が消失していた南半部でも辛うじて壁溝が確認できたため、平面形態は楕円形を呈することが判明した。規模は長軸4.79m、短軸4.25mである。壁溝は最大幅が0.29mで、深さは0.25mである。壁溝の底面は斜面上方が高く、斜面下方とは最大0.25mの高低差がある。

覆土は、住居跡の北壁付近にローム粒子・ロー



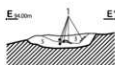
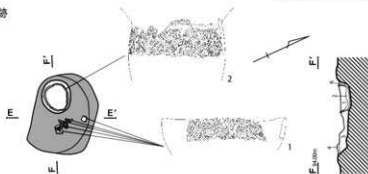
S J 4

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (1 cm大)・炭化物・焼土粒子微量
2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1 cm大) 少量
3 褐色土 炭化物・焼土粒子微量
4 暗褐色土 ソフトローム主体

P 1 ~ 10

- 1 暗褐色土 ローム粒少量 (1 ~ 3 mm大)
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量 (1 cm大)
3 暗褐色土 ローム粒子微量 粘性あり
4 暗褐色土 (暗い) ローム粒子少量 炭化物微量 しまりあり
5 暗褐色土 ローム粒子少量 粘性あり
6 褐色土 ソフトローム主体
7 暗褐色土 ローム粒子少量 ソフトロームブロック状に含む
8 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム含む
9 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1 ~ 2 cm大)・炭化物少量

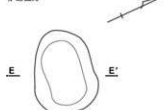
炉跡



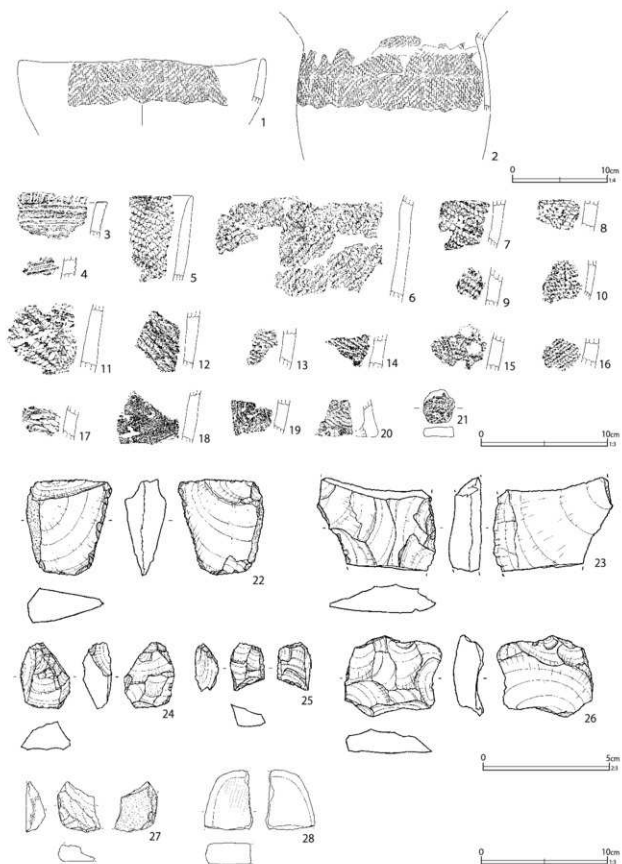
S J 4 5 跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物少量
2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量 炭化物・焼土ブロック少量
3 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1 cm大)・焼土粒子・炭化物・焼土ブロック少量
4 赤褐色土 焼土ブロック
5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1 cm大)・焼土粒子・焼土ブロック多量
6 暗褐色土 炭化物少量 飯方 埋土
7 暗褐色土 ロームブロック (1 ~ 2 cm大) 多量・焼土粒子・焼土ブロック多量 飯方 埋土

炉跡壁方



第13図 第4号住居跡



第14图 第4号住居跡出土遺物

第3表 第4号住居跡出土石器観察表 (第14図)

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
22	スクレイパー	チャート	3.8	3.4	1.6	17.7		15-3
23	スクレイパー	チャート	[3.7]	4.7	1.2	20.6		15-4
24	くさび形石器	チャート	2.6	2.0	1.2	5.6		15-5
25	くさび形石器	黒曜石	[1.9]	1.4	0.9	2.1		15-6
26	石核	チャート	3.2	3.8	1.2	13.2		15-7
27	打製石斧	砂岩	[4.0]	[3.5]	[1.5]	17.2	P 2	15-8
28	磨石	砂岩	[4.8]	[3.9]	1.8	39.8		15-9

ムブロック・炭化物・焼土粒子を含む暗褐色土がわずかに残存していた。壁溝にも暗褐色土が堆積していたが、下層にはソフトロームを主体とした褐色土が認められた。自然堆積と見られる。

残存する床面は平坦で、標高93.9m前後である。

炉跡は、住居内の中心から1.2mほど北西で検出された。検出時には上部が削平され、炉床が露出していた。直径0.49～0.65m、深さ0.1～0.15m程度の楕円形の掘方で、土器が埋設された埋甕炉である。

ピットは10基検出された。直径0.3m前後のものが多い。深さは0.13～0.62mである。明確な柱痕をもつものは認められず、柱穴の配列は不明である。

遺物は、わずかに残った覆土中や炉跡から、縄文土器と石器が少量出土した。

縄文土器は、器形がある程度判明する個体が2点ある(第14図1・2)。復元状況から、両者は別個体と考えられる。1は内湾気味に開く深鉢形土器の口縁部で、緩い波状を呈すると考えられる。R.LとL.Rの原体により、羽状縄文が施文されている。繊維を含み、内面は丁寧に整形されている。推定口径25.2cm、残存高5.0cmである。

2は深鉢形土器の口頸部から胴上半部で、1と同様に、撚りの異なる原体により、羽状縄文が施文されている。繊維を含み、内面は丁寧に整形されている。残存部最大径19.2cm、残存高8.1cmである。

3～20に破片を示した。3・4は沈線文が施文

される土器で、3は横位に、4は格子目状に半截竹管状工具による平行沈線文が施文されている。3は口唇部に密な刻み目が施されており、いわゆる大型菱形文系の土器と考えられる。いずれも繊維を含んでいる。5～17には縄文施文の土器を一括した。いずれも繊維を含み、5・11は撚りの異なる原体による羽状縄文が施文されている。11は0段多条の原体で繊維を多く含み、他とは質感が異なることから、早期末から前期初頭に遡及する可能性がある。

18・19は無文の胴部破片で、繊維を含んでいる。20は無繊維の底部破片で、胎土等から諸磯式と考えられる。

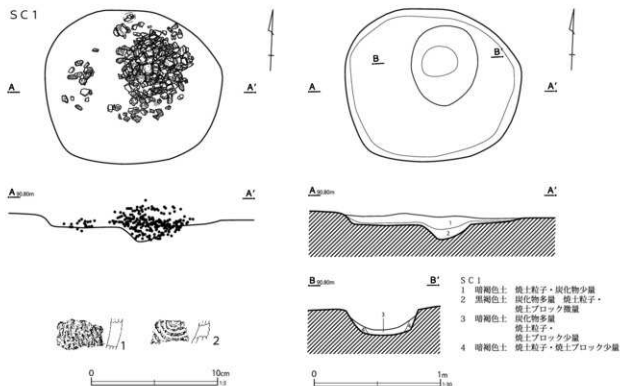
21は楕円形に整形されていることから、土器片利用の土製円盤と考えられる。繊維を含んでいる。

22・23はスクレイパーである。石材はいずれもチャートである。24・25はくさび形石器である。石材は24がチャート、25が黒曜石である。26はチャートの石核である。27は打製石斧である。28は磨石である。石材は砂岩である。

(2) 集石土壌

第1号集石土壌 (第15図)

F-7グリッドに位置する。検出地点の標高は90.5m前後である。遺構の分布が希薄な調査区東寄りに位置し、他の遺構との重複関係は見られない。第1号集石土壌の周辺は、大規模に削平されたことが窺え、土壌の底に近い部分のみ検出されたと考えられる。土壌の平面形態は円形に近く、規模は長径1.37m、短径1.2mである。検出面か



第15図 第1号集石土壌・出土遺物

らの深さは、土壌の中央部で約0.2mである。

内部には、焼土粒子と炭化物の少量混じった暗褐色土が堆積し、その上面をを覆うように礫が検出された。上面の礫を取り除くと、土壌内の北寄りの位置に直径約0.6m、深さ0.25m前後の円形の掘り込みが認められた。礫はこの掘り込みを中心に分布していた。掘り込み内の覆土は炭化物を多量に含む黒褐色土で、土壌内に堆積していた暗褐色土と異なる。

集石土壌は壁面の一部が焼土化し、中で火が焚かれたことが窺える。出土した礫は被熱し、赤く変色したものが認められる。

礫は269点で、総重量は約36kgである。大半がチャートで、石器は含まれていない。

礫は残存率が8割近く、採取時本来の大きさに近いと考えられる114点について、長さと幅を計測したところ、5～10cmと拳大よりもやや小ぶりで、重量200g前後のものが多くことが判明した。尚、礫の接合はほとんどみられなかった。

土壌内から、縄文土器の破片が少量出土した。

1は繊維を含み、器面にはRの原体による縄文が施文されている。黒浜式であろう。2は半截竹管により、弧状の沈線が施文される土器で、胎土から諸磯式と考えられる。

(3) 土壌

土壌は調査区の北寄りで5基検出された。出土遺物から、縄文時代の遺構と判断した。

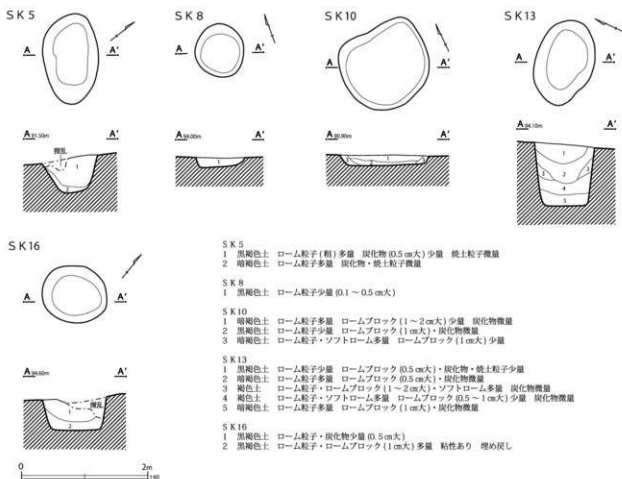
平面形態は、円形・楕円形・不整形を呈する。確認面からの深さは、0.15m程度の浅いものと0.62～1.0mの深いものがある。

第5号土壌は出土した遺物とその出土状況から、土壌層の可能性ある。他の土壌は用途や性格は不明である。

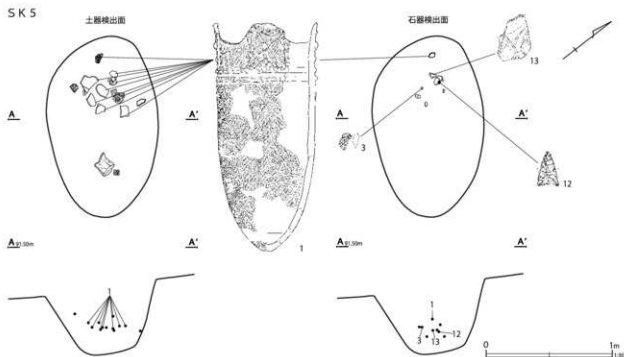
第5号土壌 (第16～18図)

E-7グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径1.43m、短径0.87mを測る。深さは0.62mである。

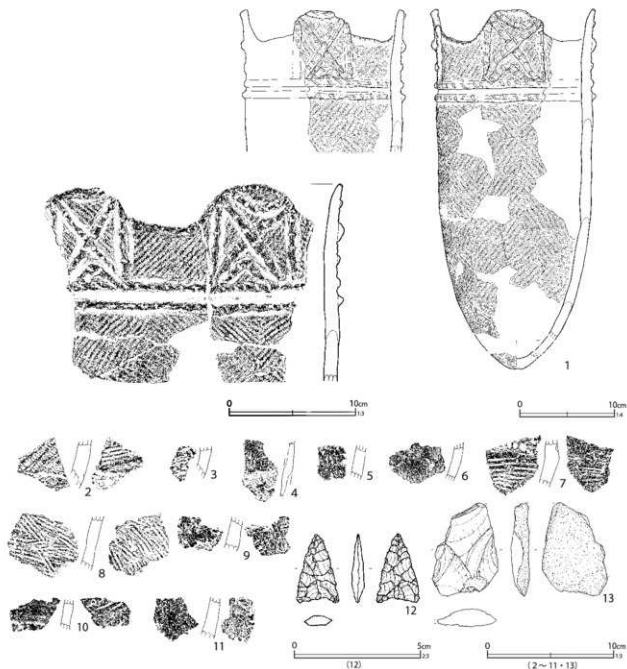
遺物は、縄文土器と石器が出土した。出土位置は土壌内でも北西側に集中し、遺物が少ない南東側では大型の礫が検出された。覆土の中心で、尖



第16図 土壌



第17図 第5号土壌遺物出土状況



第18図 第5号土壌出土土遺物

第4表 第5号土壌出土石器観察表 (第18図)

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	図版
12	石鏃	チャート	2.7	1.7	0.5	1.7		15-10
13	打製石斧	チャート	7.4	5.2	1.5	57.5		15-11

底土器の大型破片 (第18図1) が検出された。尖底土器は底部の破片が最も上位で検出されたことから、逆位の状態で埋設された可能性がある。この土器の下から、石鏃や打製石斧が出土した。こ

うした遺物の出土状況や、出土した尖底土器が近隣に類例のない異系統の土器であることから、第5号土壌は土壌墓の可能性もある。尖底土器や石器は副葬品として納められた可能性も考えられる。

1は、4単位波状の尖底深鉢形土器で、全体の約半分が現存する。繊維が少量含まれ、内面に擦痕状の整形が施されている。山形の4単位波状縁を呈し、口縁部は2本隆帯で区画されている。波状口縁部は両脇に隆帯を垂下させ長方形の区画がなされ、さらに襷状に交差する隆帯が施され、区画上下に対向する山形の隆帯を添付してモチーフとしている。隆帯上には刻みが施され、口縁部文様帯内及び胴部には0段多条の異原体縄文で大きな菱形構成の羽状縄文が施文されている。口径17.4cm、器高39.9cm、胴部最大幅16.5cm、厚さ10mm前後を測る。早期終末の打越式期の尖底羽状縄文土器と判断される。

2は、1と別個体と思われる縄文施文土器である。表面に0段多条のL R縄文が、裏面に条痕整形が施されている。縄文施文部は口縁部文様帯の下端部にあたる可能性もある。

3は、アナガラ属の貝殻腹縁文土器である。やや大きめの貝殻腹縁文が間隔を空けて併行施文され、その間に3条を単位とする貝殻腹縁文が充填されている。貝殻腹縁文の全体の文様構成は不明であるが、大きな鋸歯状文か、褶曲文を構成する可能性がある。繊維が少量含まれるが、破片が小さいため裏面整形は不明である。2・3は早期末葉の1に確実に伴うものと思われる土器群である。

4～6は、撚糸文系土器群である。4はまばらな撚糸R、5は縄文R L、6は原体が不明瞭であるが細密な撚糸文が施文されている。夏島式の新しいところから稲荷台式にかけての土器群である。

7～11は、早期末葉の条痕文系土器群の破片である。7は括れを持つ器形で、繊維が少量含まれ、内外面に条痕整形が施されるもので、段部上に円形刺突文が施される鶴ヶ島台式土器である。

8～11は、内外面に条痕整形が擦痕整形が施される土器群である。1に伴うのか、7に伴うのか判断が難しい。

12は石鏃、13は打製石斧である。いずれも石材

はチャートである。

第8号土壌 (第16・20図)

C-5グリッドに位置する。第4号住居跡に重複するが、覆土の特徴が異なるため、住居跡には伴わないと考えられる。第4号住居跡が削平されているため、新旧関係は明らかでない。

平面形態は円形を呈し、直径は0.8m程度である。深さは0.06～0.16mである。

遺物は、縄文土器の破片が少量出土した。

1は、微隆起線に施文され、文様の接点には円形刺突が施されている。内面には条痕が施され、繊維を含んでいる。鶴ヶ島台式である。

第10号土壌 (第16・20図)

C-2グリッドに位置する。平面形態はやや歪な円形を呈し、長径1.41m、短径1.28mである。深さは0.17mである。

遺物は、縄文土器の破片が少量出土した。

2はLの原体が施文された土器で、繊維を含む黒浜式である。3は半截竹管による横帯区画間に、同一工具による鋸歯状文が施文されている。口唇内面には刻み目が施されている。無繊維で諸磯式と考えられる。

第13号土壌 (第16・20図)

C-5グリッドに位置する。第4号住居跡の壁溝を掘り込み、第4号住居跡よりも新しい。平面形態は楕円形で、長径1.38m、短径0.88mを測る。深さは1.0mを測る。他の土壌に比べて深い。

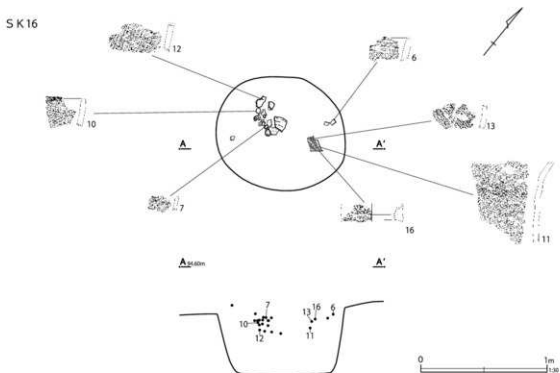
遺物は、縄文土器の破片が少量出土した。

4は胎土に繊維を含み、器内外に条痕が施されている。5は繊維を含み、L R縄文が施文された黒浜式土器である。

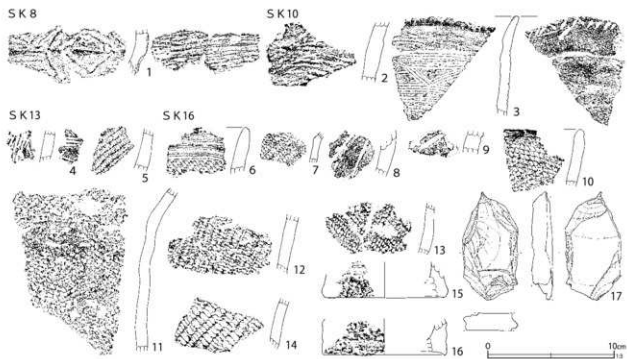
第16号土壌 (第16・19・20図)

A-3グリッドに位置する。平面形態は円形に近く、長径1.02m、短径0.9mを測る。深さは0.66mである。

遺物は、縄文土器の破片と石器が出土した。遺物は、埋め戻しの第1層から出土した。



第19図 第16号土坑遺物出土状況



第20図 土坑出土遺物

第5表 第16号土坑出土石器観察表 (第20図)

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	図版
17	打製石斧	片岩	8.6	4.4	1.7	71.5		15-12

6～16は、胎土に繊維を含む黒浜式土器である。6は口唇部に櫛歯状工具による条線が施されている。13は、半截竹管によるコンパス文が施文されている。8・9は、沈線文が描かれた土器で、9は鋸歯状の沈線文が施文されている。10～14は縄文のみの破片で、11は原体を異にして羽状施文されている。

15・16は底部の破片である。いずれも繊維を含み、16は上げ底状となっている。

17は打製石斧である。

(4) グリッド出土遺物 (第21～22図)

第1次調査では、縄文時代早期から中期にかけての土器が出土した。第1次調査と第2次調査出土土器を合わせて以下のとおり分類した。

第Ⅰ群

縄文時代早期沈線文系土器を本群とした。第1次調査区では出土していない。

第Ⅱ群 (第21図1～12)

縄文時代早期条痕文系土器を本群とした。すべて繊維を含んでいる。

第1類 (第21図1)

微隆起線により文様が描かれた土器である。文様の接点に円形刺突が施され、モチーフ内には沈線が充填されている。口唇上には刻目が施されている。鵜ヶ島台式である。

第2類 (第21図2)

沈線により文様が描かれた土器である。文様交点に円形刺突が施され、モチーフ内には、半截竹管状工具外面による連続押捺が施されている。1よりも後出的で、茅山上層式であろう。

第3類 (第21図3～11)

条痕施文のみの土器を一括して本類とした。3は器面に縦位の条痕と、指頭によると思われる斜位のナデが施されている。

第Ⅲ群 (第21図12～16)

早期末から前期初頭と考えられる土器を本群とした。いずれも繊維を含んでいる。12は口縁部破

片で、内面が肥厚し稜をもつ。口唇上から内面肥厚部にかけて縄文が施文されている。13～15は、器面に縦位の縄文が施文される土器で、13は撫糸Rが縦位に施文されている。14・15はRの原体が横位に施文されており、第Ⅳ群の可能性もある。

第Ⅳ群 (第21図17～30)

黒浜式土器を本群とした。いずれも繊維を含んでいる。出土資料に有文土器はない。

第1類 (第21図17)

無文の土器である。内外面が丁寧に研磨されており、鉢ないしは浅鉢形土器と考えられる。

第2類 (第21図18～29)

18は附加条の原体が施文されている。19は撚りの異なる原体による羽状縄文である。

第3類 (第21図30)

上げ底状の底部破片で、底部直上まで縄文が施文されている。

第Ⅴ群 (第21図31～46)

諸磯式土器を本群とした。繊維は含まれない。

第1類 (第21図31)

櫛歯状工具により、横位の条線が施される土器を本類とした。

第2類 (第21図32)

沈線文を有し、空白部に円形刺突が施される土器を本類とした。諸磯a式新段階からb式古段階に相当する。

第3類 (第21図33～37)

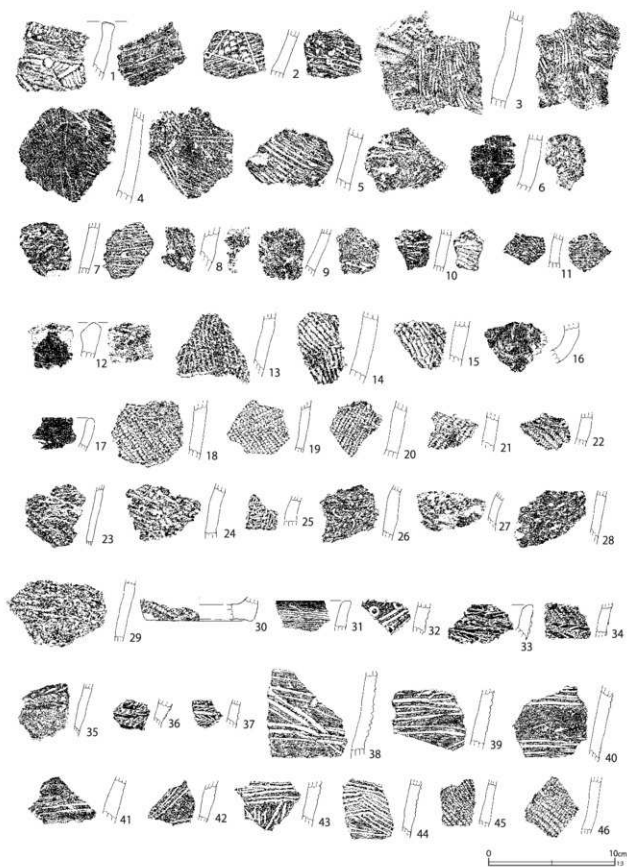
諸磯b式新段階の浮線文を有する土器を本類とした。概して浮線が細く、浮線上には斜位の刻み目が施されている。

第4類 (第21図38～44)

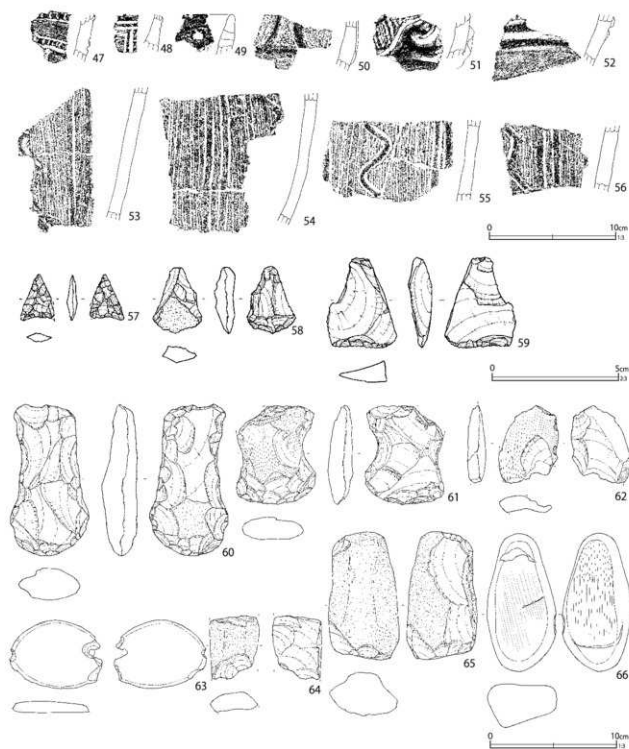
沈線文を有する土器を本類とした。残存部位からみて、横帯区画間、鋸歯状のモチーフが描かれる土器と考えられる。第2類に伴う沈線文系の土器であろう。

第5類 (第21図45～46)

縄文施文の土器を本類とした。第2類の胴部の



第21図 グリッド出土遺物（1）



第22図 グリッド出土遺物(2)

第6表 グリッド出土石器観察表 (第22図)

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	図版
57	石鏃	チャート	1.8	[1.3]	0.4	0.6		15-13
58	石鏃 (未成品)	チャート	2.6	1.9	0.8	3.5		15-14
59	スクレイパー	チャート	3.5	2.8	0.9	6.9		15-15
60	打製石斧	ホルンフェルス	12.0	6.2	2.8	222.8	B・2 G	16-1
61	打製石斧	粘板岩	7.9	6.2	2.0	112.9		16-2
62	磨製石斧	緑色岩	[6.2]	4.8	1.5	46.3		16-3
63	石鏟	砂岩	5.4	7.3	1.0	51.1	F・5 G	16-4
64	石剣	頁岩	[5.0]	[4.0]	[1.7]	37.4		16-5
65	敲石	チャート	10.3	5.7	3.8	269.3		16-6
66	磨石	砂岩	11.0	5.5	3.5	249.3		16-7

可能性がある。

第Ⅵ群 (第22図47～56)

中期の土器を本群とした。

第1類 (第22図47～48)

勝坂式と考えられる土器である。47は爪形文、48は沈線文でモチーフが描かれている。

第2類 (第22図49)

無文の口縁部破片で、焼成前に貫通孔が穿たれている。

第3類 (第22図50～52)

加曾利E式口縁部破片を本類とした。50、51は地文が燃糸文である。52は口縁下部から頸部の破片である。

第4類

連弧文系土器を本類とした。第1次調査では出土していない。

第5類 (第22図53～56)

条線地文上に、直線と蛇行して垂下する平行沈

線の土器を本類とした。曾利式の影響を受けていると考えられる。

石器 (第22図57～66)

57・58は石鏃である。57は平基無茎鏃。58は正面向下半部に自然面を残す、形状が三角形を呈することから石鏃の未製品と思われる。

59はスクレイパーである。剥片の端部に刃部加工が施されている。

60・61は打製石斧である。形状は短冊形を呈する。刃部は円刃である。

62は磨製石斧の欠損品と思われる。正面全体に研磨が施されている。

63は石鏟である。偏平楕円鏟の長軸両端に抉りが施されている。

64は石剣の破損品と思われる。横断面は台形状を呈し、裏面側は欠損している。

65は敲石である。左側面に敲痕が観察できる。

66は磨石である。

2. 平安時代

(1) 住居跡

第1号住居跡（第23～25図）

調査区の中央北寄り、C・4・5、D・4・5グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は見られない。

上部が削平され、南半部が失われていた。

平面形態は方形で、規模は東西3.36m、南北は残存長2.61mである。確認面からの深さは、最も深い部分で0.19mである。

覆土は住居跡全体に黒褐色土が堆積し、その下に暗褐色土の薄い堆積層が認められた。堆積状況から自然堆積と判断できる。

床面は貼床が施され、概ね平坦である。標高は92.4m前後である。

床面でピットと貯蔵穴が検出された。

ピットは6基検出された。直径0.2～0.4m程度のものが多く、深さは0.18～0.63mである。ピットの配置に規則性は認められない。

貯蔵穴は2基検出された。住居跡の東壁際に貯蔵穴1、北隅に貯蔵穴2が位置する。いずれも平面形態は楕円形を呈し、規模は直径0.8m程度、深さ0.17～0.4mである。カマドの位置関係から、貯蔵穴1はカマド1もしくはカマド2に、貯蔵穴2はカマド3に対応する可能性がある。

カマドは3基検出された。

カマド1は、住居跡の北東角に設けられていた。袖部は検出されなかった。燃焼部は、残存長1m、幅0.4mである。内部に炭化物や焼土ブロック、焼土粒子を多量に含む赤褐色土や暗褐色土が堆積していた。

カマド2は、南東壁の北端に設けられていた。燃焼部のみ検出され、袖部は検出されなかった。燃焼部は円形の土域状で、壁を切り込んで構築されていた。残存規模は、直径0.68mである。住居跡の床面から0.2mほど掘り窪められ、奥壁が急

角度で立ち上がる。

カマド3は、北東壁の中央部に設けられ、壁を切り込んで構築されていた。平面形態は楕円形を呈し、袖部が壁から0.3mほど突出する。規模は、残存長0.88mで、袖部幅0.72mである。燃焼部奥壁近くでは、底面が丸く掘り窪められていた。支脚の設置痕の可能性がある。内部に多量のロームと微量の炭化物を含む暗褐色土が堆積していたが、灰層は確認されなかった。

カマド相互の新旧関係は、カマド2の堆積土がカマド1の上面を覆っていることから、カマド2がカマド1よりも新しいと推定される。また、カマド3は袖部が残存していることから、最も新しい可能性が高い。構築順等は、カマド1→カマド2→3と想定される。

遺物は、カマド2・カマド3付近から、まとまって出土した。灰釉陶器や須恵器・土師器・砥石・鉄製品が出土した。

1・2は灰釉陶器で、いずれも東濃産と見られる。1は埴である。三日月高台で、施釉は刷毛塗りによる。底部外面に「賀厨」と墨書きされている。2は長頸甕の口縁部である。

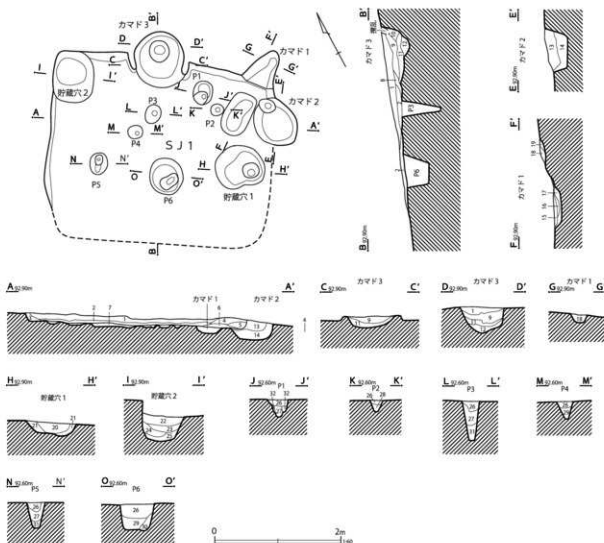
3～18は須恵器である。3は蓋である。4～15は坏である。高台付坏を含む可能性がある。口縁端部が玉縁状に肥厚するものが多い。14・15は底部で、糸切痕が明瞭に残る。形態や胎土から東金子産と考えられる。16・17は高台付坏である。胎土の特徴から末野産と見られる。18も高台付坏である。産地は不明である。

19はロクロ土師器である。

20～23は土師器の甕である。21は胎土に角閃石粒が目立つ。

24は砥石である。

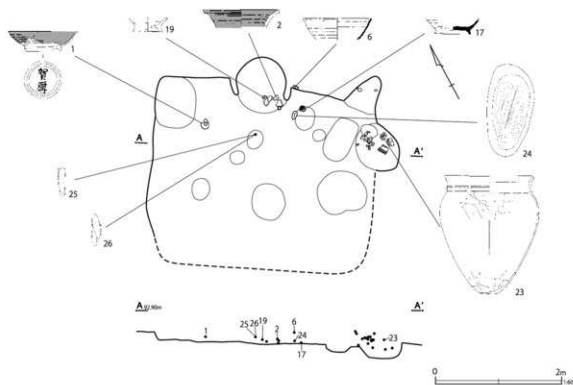
25・26は鉄製品である。種類は不明である。



- 5 J 1
 1 黒褐色土 ローム粒子少量 炭化物・焼土粒子微量
 2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2 cm大)・炭化物少量 焼土粒子微量
 3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子微量 ソフトローム含む
 4 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量 遺物が出土する層
 5 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
 6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量 炭化物少量
 7 黒褐色土 ロームブロック多量 焼土粒子少量 底床
- カマド 1・2・3
 カマド 3
 8 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量 炭化物少量
 9 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物・灰白色粘土ブロック少量 炭化物微量
 10 褐色土 ソフトローム主体
 11 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子少量 焼土ブロック微量
 12 暗褐色土 ロームブロック・炭化物少量
 13 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
 カマド 2
 14 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量 炭化物微量
 カマド 1
 15 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子少量 炭化物微量
 16 赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック多量 炭化物少量
 17 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子少量
 18 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
 19 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・焼土ブロック少量

- 貯蔵穴 1
 20 黒褐色土 ローム粒子 (粗)・ロームブロック (1~2 cm大) 少量 炭化物微量
 21 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子少量 ロームブロック (1 cm大) 微量
- 貯蔵穴 2
 22 黒褐色土 ソフトロームブロック (1~2 cm大) 多量
 23 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量 焼土粒子微量
 24 黒褐色土 ローム粒子 (粗)・ロームブロック (1~2 cm大) 少量 炭化物微量
 25 褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム・ロームブロック主体
 26 暗褐色土 ローム粒子 (粗) 多量 ロームブロック (1 cm大)・焼土粒子少量 炭化物微量
- P 1~6
 27 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック・炭化物微量
 28 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
 29 暗褐色土 ローム粒子 (粗) 多量 ロームブロック (1 cm大)・炭化物微量
 30 黒褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
 31 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
 32 褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~3 cm大) 多量

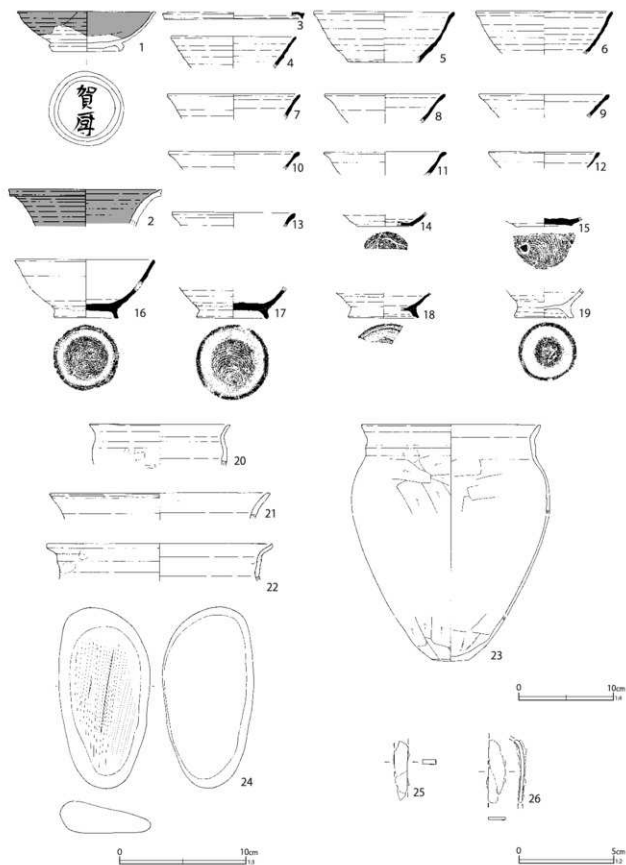
第23図 第1号住居跡



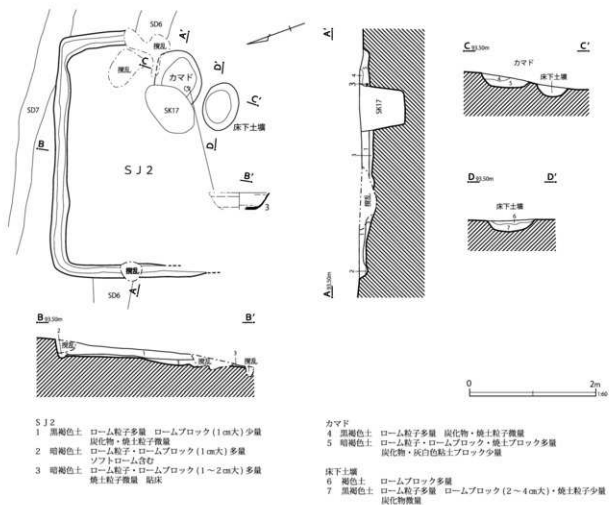
第24图 第1号住居跡遺物出土状況

第7表 第1号住居跡出土遺物觀察表(第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	国版	
1	灰釉陶器	埴	14.4	4.2	7.0	K	90	良好	灰黄	東瀬戸 9世紀後半	底部墨書「賀賀」	16-8
2	灰釉陶器	長頸壺	(16.2)	(3.9)	—	K	15	良好	灰黄	東瀬戸 9世紀後半	カマド 1	17-1
3	須恵器	蓋	(14.6)	(0.8)	—	I	5	良好	灰	東金子産	P 6	
4	須恵器	坏	(13.2)	(3.4)	—	1 K	10	良好	灰	東金子産		
5	須恵器	坏	(14.8)	5.4	(7.6)	1 K	35	不良	淡黄	東金子産		17-2
6	須恵器	坏	(14.3)	(4.5)	—	—	20	普通	灰黄	東金子産	カマド 1	
7	須恵器	坏	(13.9)	(2.7)	—	K	8	普通	浅黄橙	東金子産	貯蔵穴 2	
8	須恵器	坏	(12.8)	(3.1)	—	I	10	普通	灰黄	東金子産		
9	須恵器	坏	(13.8)	(2.5)	—	1 K	8	普通	灰白	東金子産	P 5	
10	須恵器	坏	(13.8)	(1.9)	—	1 K	8	普通	灰白	東金子産	カマド 1	
11	須恵器	坏	(12.6)	(2.5)	—	I	10	普通	浅黄橙	産地不明	酸化塩焼成	
12	須恵器	坏	(11.6)	(1.7)	—	E K	5	普通	灰白	東金子産		
13	須恵器	坏	(13.0)	(1.5)	—	I	5	普通	にお栗色	東金子産	カマド 1	
14	須恵器	坏	—	(1.5)	(6.0)	1 K	10	普通	灰白	東金子産		
15	須恵器	坏	—	(0.8)	(6.0)	E 1 J K	80	普通	にお栗色	東金子産		
16	須恵器	坏	(14.5)	(6.2)	(6.7)	B 1	70	良好	灰黄	木野産		17-3
17	須恵器	高台付坏	—	[3.4]	(7.5)	B 1 K	80	良好	灰黄	木野産	カマド 1	17-4
18	須恵器	高台付坏	—	(2.7)	(7.3)	K	20	良好	灰白	東金子産		17-5
19	ロクロ土器器	高台付坏	—	(3.1)	(6.2)	1 K	80	普通	灰白	カマド 1		
20	土師器	甕	(14.8)	(4.3)	—	K	15	普通	にお栗色			
21	土師器	甕	(23.4)	(2.7)	—	C 1	10	普通	にお栗色	P 6		
22	土師器	甕	(23.8)	(4.0)	—	C 1	10	普通	にお栗色			
23	土師器	甕	(19.0)	(25.0)	(4.3)	C E 1 K	20	普通	にお栗色			
24	石製品	砥石	長さ14.5	幅7.9	厚さ2.9	重さ389.9 g	砂岩			カマド 1		17-6
25	鉄製品	棒状品	長さ3.1	幅0.8	厚さ0.25	重さ1.3 g						
26	鉄製品	棒状品	長さ3.3	幅0.9	厚さ0.20	重さ2.1 g						



第25図 第1号住居跡出土遺物



第8表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第27図)

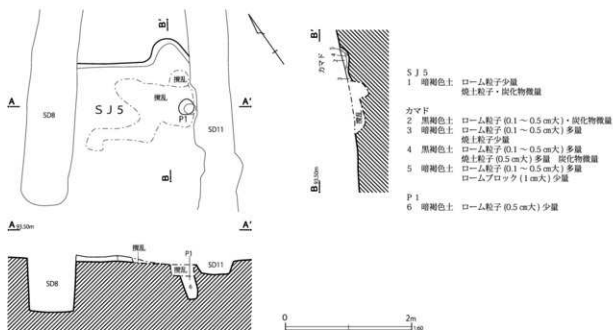
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(17.4)	[1.7]	—	IJK	15	良好	灰	南比企産	17-7
2	須恵器	坏	(12.2)	[2.4]	—	IJK	10	良好	灰	南比企産	
3	須恵器	坏	(12.8)	3.6	(6.4)	IJK	15	良好	灰	南比企産	17-8
4	須恵器	甕	—	[5.1]	(15.4)	IJK	10	良好	灰	南比企産	
5	土師器	甕	(22.5)	[3.1]	—	CI	10	普通	にが栗色		

第2号住居跡 (第26・27図)

調査区の北西部、B-3・4、C-3・4グリッドに位置する。検出面は標高93m前後で調査区

内の比較的標高の高い場所に位置する。

第17号土壌・第6号溝跡と重複し、第17号土壌によりカマドが壊されていた。



第28図 第5号住居跡

本住居跡の平面形態は、残存部の形状から方形と推測される。規模は、東西3.9m、南北の残存長2.48mである。確認面からの深さは、0.07～0.19mである。

覆土は、住居跡全体にローム粒子やロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

住居跡掘方の底面には凹凸があるが、床面は貼床が施され平坦である。

住居跡の北半部のみ壁溝が確認された。壁溝は幅0.2m前後で、深さ0.03m程度である。

カマドは東壁に付設され、燃焼部のみが検出された。確認面には、焼土や灰褐色粘土ブロックが認められた。大部分が植物の根による掘乱を受けていた。袖部は検出されなかった。燃焼部の平面形態は楕円形で、残存長0.6m、幅0.76mである。奥壁は急角度で立ち上がる。

カマドは燃焼部全体が住居跡の内部に収まることから、東側への拡張を伴う住居の建て替えが行われた可能性も考えられる。

カマドの南脇に床下土壌が検出された。平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.55mである。深さは0.18mである。カマドに対応する貯

蔵穴であった可能性が高く、住居跡を拡張した段階に埋め戻され、貼床が貼られたことが推定される。

遺物は、須恵器・土師器が少量出土した。

1～4は須恵器である。いずれも胎土に針状物質を含み、南北企産である。坏は、器形の特徴から鳩山編年のV期に位置づけられる(渡辺編1988)。

5は土師器甕の口縁部である。強いヨコナデが施され、端部は屈曲して立ち上がる。

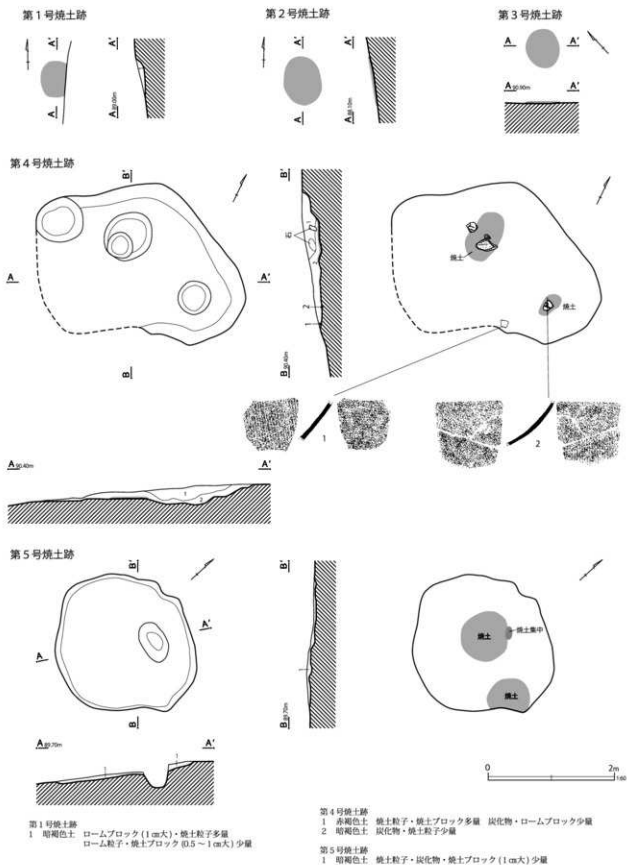
第5号住居跡 (第28図)

調査区の西端、B-2・3グリッドに位置する。第8・11号溝跡によって削平されていた。

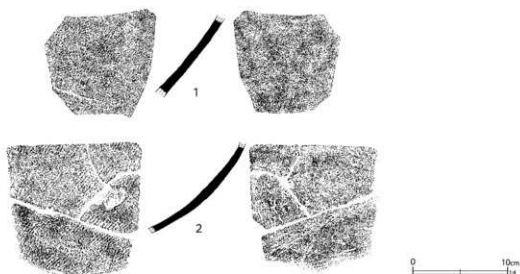
残存状態が非常に悪く、北壁に位置するカマドとその周辺のみが検出された。覆土は薄く、床面も認められなかった。北壁は直線的で、平面形態は方形と推定される。

カマドは燃焼部の一部が残存し、焼土や構築材と見られる白色粘土が部分的に認められた。

年代を特定することは困難であるが、形態などから、平安時代と判断した。



第29図 第1～5号焼土跡



第30図 第4号焼土跡出土遺物

第9表 第4号焼土跡出土遺物観察表（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[8.7]	—	I K	—	良好	オリーブ		17-9
2	須恵器	甕	—	[9.6]	—	I J	—	普通	暗灰黄	南北企産	17-10

(2) 焼土跡

焼土跡は5基検出された。いずれも、遺構の分布が希薄な調査区南側に位置する。焼土跡は、住居跡のカマドや屋外燃焼施設の痕跡等の可能性が考えられる。

第1号焼土跡（第29図）

G-8グリッドに位置する。南北0.57m、深さ0.14mの楕円形の掘方に、焼土ブロックや焼土粒子が堆積していた。

第2号焼土跡（第29図）

G-9グリッドに位置する。長径0.77m、短径0.6mの楕円形の範囲に焼土ブロック・粒子や炭化物が検出された。焼土面の下に、掘り込みはなかった。

第3号焼土跡（第29図）

F-7グリッドに位置する。長径0.63m、短径0.53mの楕円形の範囲から、焼土粒子や炭化物が検出された。掘り込みはなかった。

第4号焼土跡（第29・30図）

F-6グリッドに位置する。不整形の浅い掘り込みで、規模は長径3.14m、短径2.2m、深さ0.28mである。掘り込みには、焼土ブロックや焼土粒子・炭化物を含む赤褐色土が堆積し、その下に炭化物や焼土粒子を含む暗褐色土が認められた。底面は被熱し、硬化した部分もある。

掘り込みの底面にピットが3基認められた。いずれも平面形態は円形で、直径0.52～0.74mを測る。深さは西端のピットが0.15mと最も深く、他は0.08～0.11mである。ピットのうち2基は、位置が焼土の確認範囲と対応する。

遺物は、須恵器甕の破片が2点出土した。

第5号焼土跡（第29図）

E-3グリッドに位置する。平面方形、深さ0.06mの浅い掘り込みの中央部と南東隅に焼土が検出された。掘り込みの規模は、長軸長2.1m、短軸長2.08mを測る。中央北東寄り、焼土集中部分の直下に楕円形のピットが認められた。長径0.68m、短径0.4m、深さ0.2～0.3mである。

3. 近世

(1) 土壌 (第31図)

土壌は11基検出された。大半が調査区内でも標高の高い北半部に分布する。

各土壌の概要は第10表に示した。

土壌には、平面形態が細長い隅丸長方形を呈するもの（第1～4・11・14・15土壌）と、楕円形に近いもの（第6・7・12・17号土壌）がある。

細長い土壌は、標高91.40m付近に分布し、長軸方位が溝跡の走向方位と共通する。掘り込みが浅いことや上部が削平されていることを勘案すると、溝跡の一部が残存したものである可能性が考えられる。

楕円形の土壌は、長径0.8～0.9m、短径0.6～0.8mを測る。第17号土壌以外は、掘り込みが浅く、底面は掃鉢状を呈する。確認面からの深さは0.2～0.3m前後である。第17号土壌は確認面からの深さが0.72mを測る。

覆土は、ローム粒子やロームブロックを含む黒褐色土や暗褐色土、褐色土である。炭化物や焼土粒子を含むものも認められた。

出土遺物がほとんどなく、年代を特定できないが、他の遺構との重複関係や覆土の特徴等から近世と推定される。いずれの土壌も、用途や性格は不明である。

(2) 溝跡 (第32～35図)

溝跡は15条検出された。いずれも標高が高い調査区の北半部に位置する。

溝の掘り込みはしっかりしたものが多く、断面形は逆台形を呈する。溝幅は0.3～0.8mを測るものが多く、確認面からの深さは0.15m以下の浅いものが目立つ。

ただし、上部が削平されていることや、断面形が逆台形を呈することから、本来の溝幅はさらに広く、深さも有していたと推定される。

溝跡は、等高線に沿って北東から南西方向、またはその直交方向である、北西から南東方向に延びている。

底面は、若干の起伏はあるものの、平滑である。北東から南西に延びる溝跡の底面は、総じて北東が高く、南西が低い。また、北西から南東に伸びる溝跡では、いずれかの一端、あるいは両端が低くなっている。

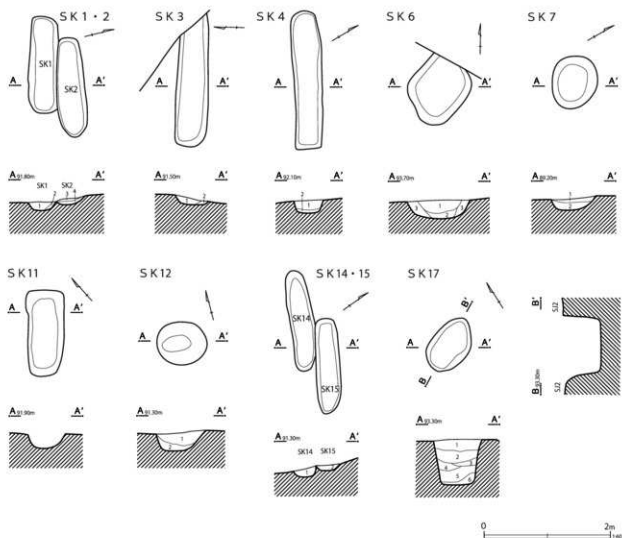
遺物は出土しなかったが、他の遺構との重複関係や覆土の様相から近世と判断した。各溝跡の概要は第11表に示した。

溝跡は、L字状・コの字状に屈曲するものがあることや底面に高低差がつけられていることから、区画や排水のために掘削されたと考えられる。

第10表 土壌一覧表 (第31図)

単位：m

遺構名	時期	グリッド	平面形	長軸方位	長軸	短軸	深さ	重複	備考
第1号土壌	近世	E-7	隅丸長方形	N-76°-W	1.54	0.45	0.13	SK2	
第2号土壌	近世	E-7	隅丸長方形	N-80°-W	1.06	0.46	0.14	SK1	
第3号土壌	近世	E-8	隅丸長方形	N-88°-W	1.95	0.52	0.15		
第4号土壌	近世	D-E-7	隅丸長方形	N-60°-W	2.02	0.43	0.20		
第6号土壌	近世	D-6	不整形	N-26°-E	1.03	0.87	0.29		
第7号土壌	近世	D-1	楕円形	N-49°-W	0.70	0.85	0.19		
第11号土壌	近世	C-D-4	隅丸長方形	N-44°-E	1.36	0.56	0.22		
第12号土壌	近世	D-4	楕円形	N-74°-W	0.80	0.66	0.28		
第14号土壌	近世	C-3	隅丸長方形	N-62°-W	1.61	0.38	0.17	SK15	
第15号土壌	近世	C-3	隅丸長方形	N-56°-W	1.50	0.38	0.09	SK14	
第17号土壌	近世	B-C-4	楕円形	N-61°-E	0.92	0.69	0.72	SJ2 (旧)	



SK1・2

SK1

- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量 (1~2cm大) 壁の崩落土

SK2

- 3 暗褐色土 ローム粒子少量
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量

SK3

- 1 黒褐色土 ローム粒子微量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1cm大) 少量

SK4

- 1 黒褐色土 ローム粒子微量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量 (1cm大)

SK6

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量 (2~5cm大)
- 2 褐色土 ソフトローム多量 ロームブロック (1cm大) 少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量

SK7

- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色土 ロームブロック・炭化物少量

SK12

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック多量 炭化物・焼土粒子微量
- 2 黒褐色土 ローム粒子微量 ロームブロック少量

SK14・15

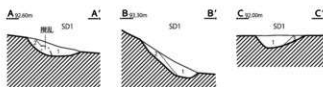
- SK14 褐色土 ソフトローム主体 ロームブロック (1cm大) 多量
- SK15 2 黒褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量

SK17

- 1 褐色土 ロームブロック主体 焼土粒子・炭化物少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物・焼土粒子微量
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1cm大) 微量
- 4 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1cm大) 少量
- 5 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1cm大) 微量
- 6 褐色土 ソフトローム主体

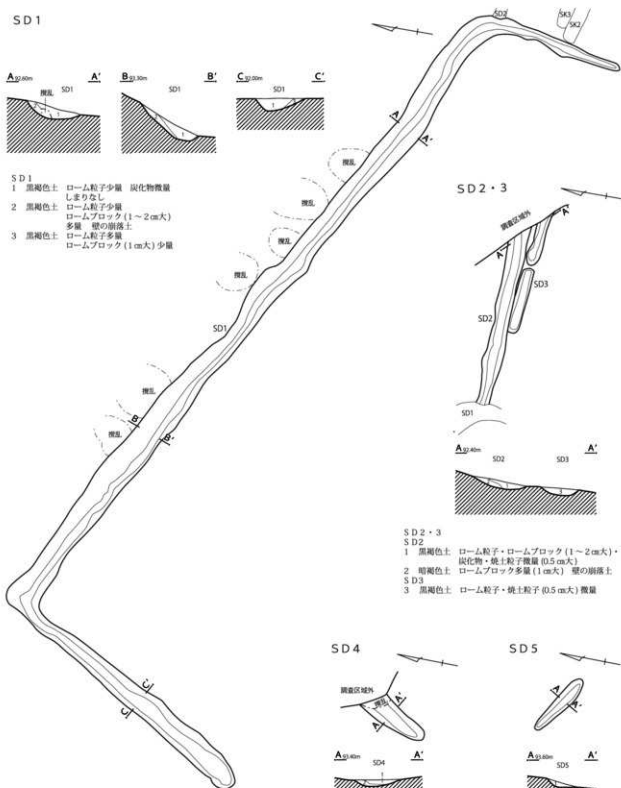
第31図 土壌

SD 1

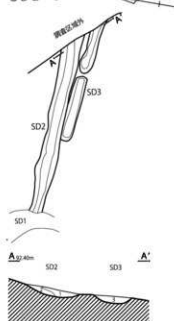


SD 1

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
 2 黒褐色土 ローム粒子少量
 ロームブロック (1~2 cm大)
 多量 礫の崩壊土
 3 黒褐色土 ローム粒子多量
 ロームブロック (1 cm大) 少量



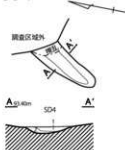
SD 2・3



SD 2・3

- SD 2
 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2 cm大)・
 炭化物・焼土粒子微量 (0.5 cm大)
 2 暗褐色土 ロームブロック多量 (1 cm大) 礫の崩壊土
 SD 3
 3 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子 (0.5 cm大) 微量

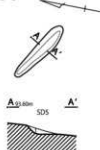
SD 4



SD 4

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック微量
 2 褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2 cm大) 多量

SD 5

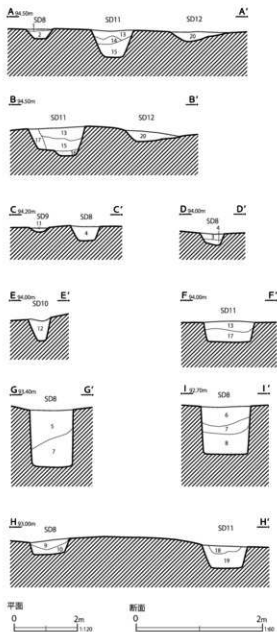
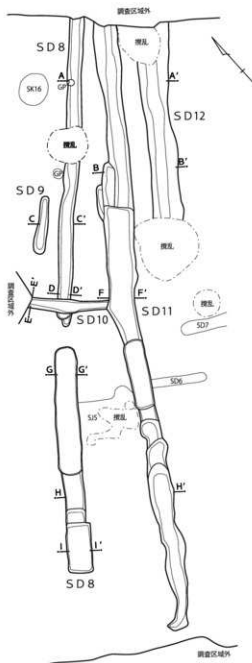


SD 5

- 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2 cm大) 多量



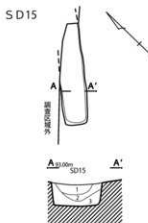
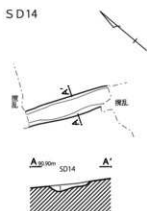
第32図 溝跡 (1)



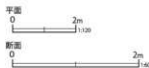
- SD8**
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
 - 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック(1~3cm大)多量
 - 3 黒褐色土 ローム粒子を密に含む ロームブロック(2cm大)少量
 - 4 褐色土 ロームブロック(1~5cm大)多量
 - 5 黒褐色土 腐入 ロームブロック(1cm大)少量
 - 6 黒褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~5cm大)少量
 - 7 黒褐色土 ローム粒子少量
 - 8 黒褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~2cm大)少量
 - 9 暗褐色土 炭化物多量 しまりなし
 - 10 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(1~2cm大)多量
 - 11 黒褐色土 ローム粒子多量
- SD9**
- 11 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック(1cm大)少量

- SD10**
- 12 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(1~2cm大)多量
 - ソフトローム含む
- SD11**
- 13 黒褐色土 ローム粒子(0.1~0.5cm大)多量
 - 14 黒褐色土 ロームブロック(1cm大)少量
 - 15 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 16 黒褐色土 大型のロームブロック(3~5cm大)含む
 - 17 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム含む
 - 18 暗褐色土 ロームブロック(1~2cm大)多量
 - 19 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(1~2cm大)少量
 - 20 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 21 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック(1~2cm大)多量
 - 22 暗褐色土 炭化物粒・微量
 - 23 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子微量
- SD12**
- 20 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック(1cm大)少量

第34図 溝跡(3)



- SD13
1 黒褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
2 褐色土 ソフトローム主体
3 褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量 ロームブロック(1cm大)少量
- SD14
1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック(1cm大)多量
- SD15
1 黒褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大)多量 炭化物微量
2 黒褐色土 ローム粒子(粗)少量 ロームブロック(1~2cm大)・炭化物微量
3 黒褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~3cm大)少量



第35図 溝跡(4)

第11表 溝跡一覧表(第32~35図)

単位: m

遺構名	時期	グリッド	走行方位	長さ	幅	深さ	重複	備考
第1号溝跡	近世	C-5 D-4~7 E-7	N-61°-W N-31°-E N-11°-E	36.80	0.36~1.02	0.22~0.57	SD2	
第2号溝跡	近世	E-7・8	N-83°-W	(5.50)	0.46~0.56	0.09~0.18	SD1 SD3	
第3号溝跡	近世	E-7・8	N-81°-W	[3.80]	0.36~0.40	0.10~0.13	SD2	
第4号溝跡	近世	C-6	N-26°-E	(2.00)	0.56~0.75	0.12~0.14		
第5号溝跡	近世	C-5	N-57°-W	2.14	0.31~0.46	0.12~0.13		
第6号溝跡	近世	B-3・4 C-4・5	N-58°-W N-35°-E	[29.50]	0.29~0.66	0.06~0.24	SJ2(旧) SD11	
第7号溝跡	近世	B-3・4 C-4・5	N-57°-W	26.00	0.35~0.64	0.08~0.14	SJ2(旧)	
第8号溝跡	近世	A-3 B-2・3	N-43°-E	[17.60]	0.43~0.80	0.26~0.93	SJ5(旧) SD10(旧)	
第9号溝跡	近世	A-3	N-51°-E	1.85	0.26~0.36	0.08		
第10号溝跡	近世	A・B-3	N-45°-W	(2.50)	0.30~0.36	0.24~0.36	SD8(新) SD11(新)	
第11号溝跡	近世	A-3 B-2・3	N-35°-E	(19.40)	0.56~0.88	0.20~0.46	SJ5(旧) SD10(旧) SD6	
第12号溝跡	近世	A・B-3	N-39°-E	(6.30)	0.78~0.83	0.14~0.20		
第13号溝跡	近世	B・C-5	N-4°-E	2.40	0.32~0.45	0.18~0.20		
第14号溝跡	近世	C-2	N-59°-W	(2.72)	0.56~0.62	0.08~0.11		
第15号溝跡	近世	B-2	N-45°-E	(3.20)	0.75~0.80	0.34~0.41		

V 第2次調査の遺構と遺物

1. 縄文時代

(1) 住居跡

第2号住居跡 (第36・37図)

A区の中央北西寄り、C-2グリッドに位置する。北東隅は近世の第10号土壌によって壊されていた。

平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸3.72m、短軸3.7mである。

確認面からの深さは0.25mである。床面は平坦で、標高は84.7m前後である。

覆土は、上層に灰黄褐色土、下層に暗褐色土が

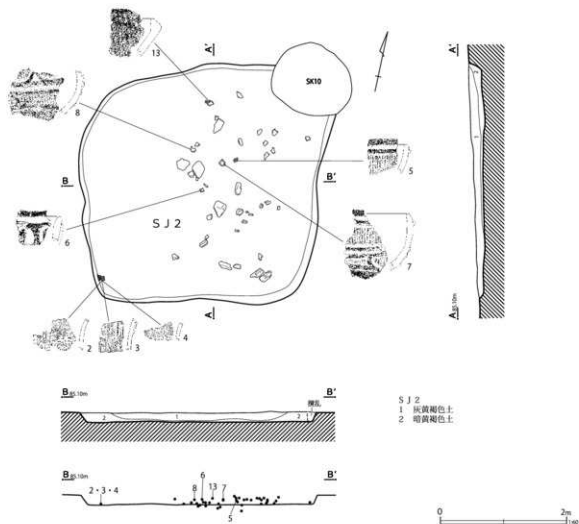
堆積していた。レンズ状の堆積を示し、自然堆積と見られる。

が跡や柱穴は検出されなかった。

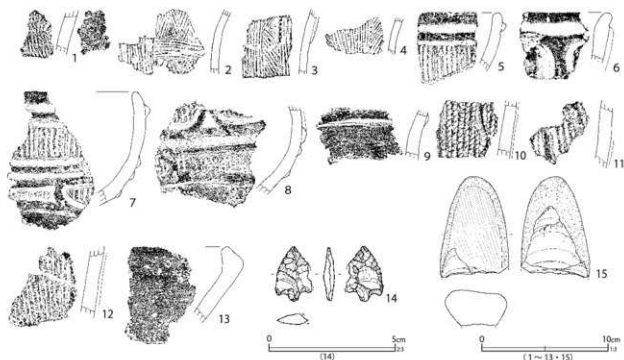
住居東半部の床面付近から、縄文土器と石器が出土した。

1は条痕文系の土器で、胎土に繊維を含んでいる。

2～4は諸磯c式土器である。文様は半截竹管を束ねた工具により、密接した沈線で描かれ、縦位の沈線を境に、対弧状の沈線や、内部を充填す



第36図 第2号住居跡



第37図 第2号住居跡出土遺物

第12表 第2号住居跡出土石器観察表 (第37図)

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ[g]	備考	図版
14	石鏃	黒曜石	2.2	1.4	0.4	1.0		26・2
15	磨石	砂岩	[8.0]	5.4	[3.9]	182.2		26・3

る鋸歯状の沈線などが描かれている。3は細く押圧が施された隆帯を有している。

5～12はキャリバー形の加曾利E式土器である。5～9は口頸部破片で、地文には燃系が施されている。10～12は胴部破片で、燃系地文上に、垂下する隆帯が貼付されている。

13は無文の土器で、口唇端が屈曲する。鉢形土器であろう。

石器の概要は第12表に示した。

(2) 炉穴

B区で3基検出された。覆土に焼土を含むことから炉穴と判断した。遺物は出土しなかった。

第1号炉穴 (第38図)

L-7グリッドに位置する。地山を浅く掘り込むもので、平面形態は不整形である。規模は主軸長3.97m、最大幅1.35mを測る。下部は削平され、斜面下方の北半部では覆土がほとんど失われていた。焼土は南端に長径0.8m、短径0.6mの楕円形の範囲に認められた。

第2号炉穴 (第38図)

M・N-6グリッドに位置する。地山を浅く掘り込み、平面形態は歪な楕円形を呈する。規模は長径1.25m、短径0.65mを測る。

第3号炉穴 (第38図)

O-6グリッドに位置する。地山を浅く掘り込み、平面形態は円形を呈する。規模は直径0.54mである。

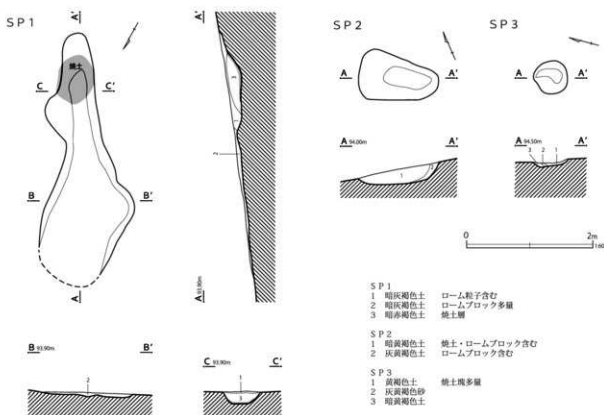
(3) 土墳

土墳はA区で1基、B区で7基検出された。B区では、標高94.2m付近に分布が集中する。

出土遺物等から、縄文時代と判断した。

平面形態は楕円形や隅丸方形を呈し、規模は長軸長1.5～2.2m、短軸長0.7～1.5mを測る。底面に多数の小穴が検出されたものがある。

第36号土墳と第48号土墳、第37号土墳と第45号土墳は、ほぼ同じ標高に間隔を空けて分布する。こうした配置や土墳底面の小穴の存在から、落し穴の可能性が考えられる。



第38図 竈穴

第1号土坑 (第39・41図)

C-3グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は長径1.42m、短径0.75mである。確認面からの深さは0.78mである。主軸方位はN-42°-Eを指す。

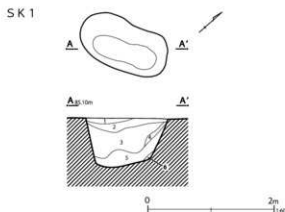
遺物は、縄文土器の破片が少量出土した。1・2は条痕文土器で、胎土には繊維を含んでいる。3は沈線で文様が描かれ、後期の可能性がある。

第36号土坑 (第40図)

M-6グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形で、主軸方位はN-37°-Wを指す。規模は長軸長1.24m、短軸長0.67mである。確認面からの深さは0.96mである。平坦な底面に直径0.1m前後、深さ0.05~0.15m程度の小穴が5基認められた。小穴は土坑の隅や壁際に多い。

第37号土坑 (第40図)

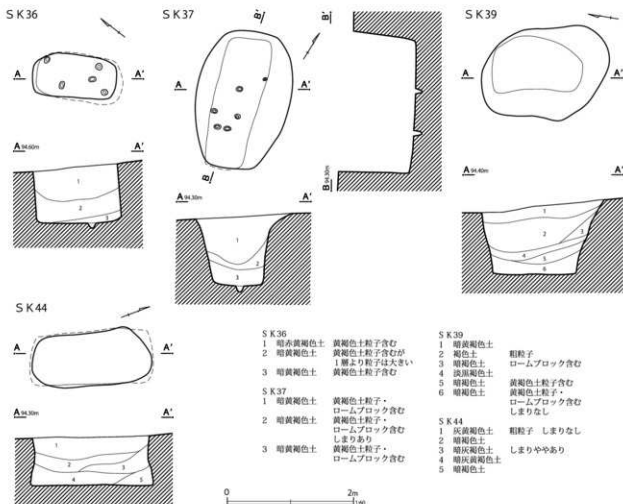
M-6グリッドに位置する。主軸方位はN-25°-Wを指す。平面形態は確認面で隅丸長方形、



- SK 1
1 黒褐色土 しまりあり
2 黒褐色土 暗褐色土を部分的に含む しまりあり
3 黒褐色土 暗褐色土を部分的に含む しまりあり
4 暗褐色土 しまりあり
5 暗褐色土 黒褐色土を含む しまりあり
6 黒褐色土 しまりあり

第39図 土坑 (1)

底面は長方形である。規模は長軸長2.18m、短軸長1.49mである。確認面からの深さは1.2mを測る。平坦な底面に直径0.1m前後、深さ0.05~0.15m程度の小穴が6基認められた。



第40図 土壌 (2)



第41図 土壌出土遺物

第39号土壌 (第40・41図)

M・N-6グリッドに位置する。主軸方位はN-28°-Wを指す。平面形態は隅丸長方形で、底面は平坦である。規模は長軸長2.05m、短軸長1.52mである。確認面からの深さは1.18mである。

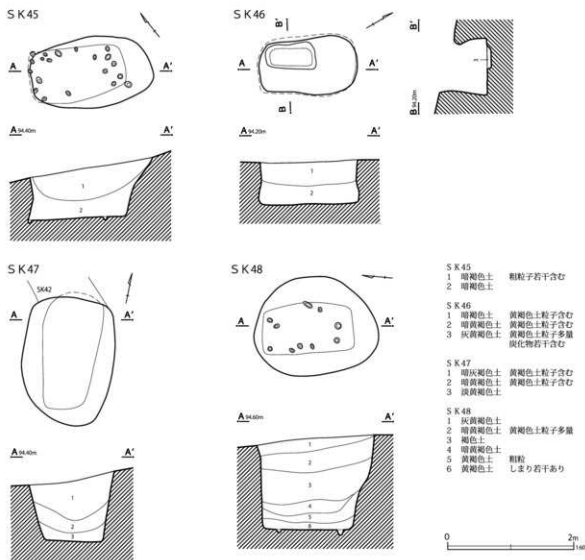
遺物は、縄文土器の破片が少量出土した。4は条痕文土器で、胎土には繊維を含んでいる。

第44号土壌 (第40図)

N-6グリッドに位置する。主軸方位はN-20°-Eを指す。平面形態は確認面では長楕円形、底面は長方形を呈し、平坦である。規模は長径1.82m、短径0.85mである。確認面からの深さは0.76mである。

第45号土壌 (第41・42図)

N-6グリッドに位置する。主軸方位はN-55°-Wを指す。平面形態は確認面では楕円形を



第42図 土壌 (3)

呈し、底面は長方形である。規模は長径1.91m、短径1.12mである。確認面からの深さは0.96mである。平坦な底面に直径0.1m前後、深さ0.05～0.15m程度の小穴が10基認められた。小穴は土壌の中央部を避け、短辺に偏って配されている。

遺物は、縄文土器の破片が少量出土した。5は胎土に繊維を含み、器面にRL縄文が施文されている。口唇上に円形刻突が施されていることから、早期末から前期初頭の可能性がある。

第46号土壌 (第42・55図)

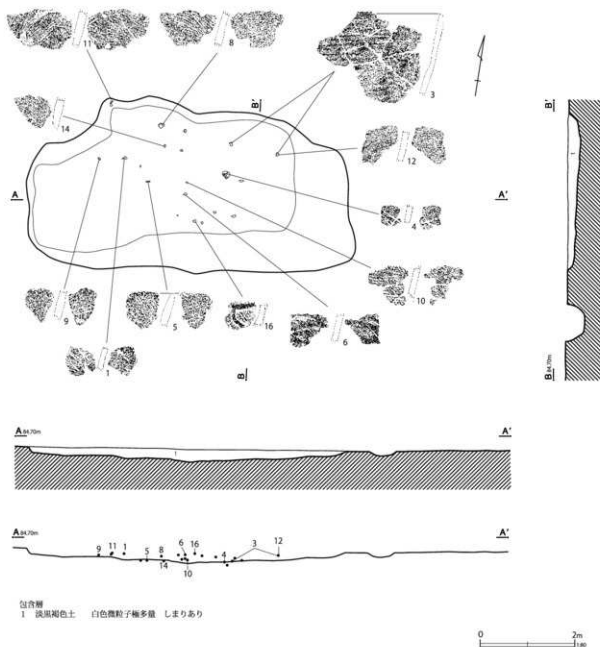
N-5・6グリッドに位置する。平面形態は長楕円形で、主軸方位はN-29°-Eを指す。規模

は長径1.55m、短径0.83mで、深さ0.7mである。土壌底面西側に方形の浅い掘り込みが認められた。掘り込みの用途や機能は不明である。

遺物は、釘と棒状鉄製品(第55図3・4)が出土した。混入品と見られる。

第47号土壌 (第42図)

N-6グリッドに位置する。主軸方位はN-6°-Wを指す。平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸長1.99m、短軸長1.43mである。確認面からの深さは1.1mである。断面形は、北側の下方が広がる袋状の断面を呈している。



第43図 包含層

第48号土坑 (第42・55図)

N-6グリッドに位置する。主軸方位はN-10°-Wを指す。平面形態は確認面で楕円形、底面は長方形を呈する、規模は長径1.92m、短径1.55mである。確認面からの深さは1.51mである。底面に直径0.1m前後、深さ0.05~0.15m程度の小穴が10基認められた。長方形を呈する底面の各辺中央付近の壁際に2~3基が配されている。

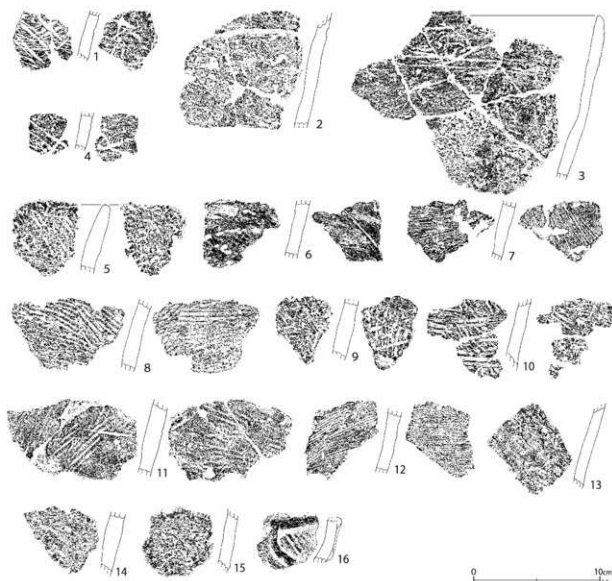
釘 (第55図5) は混入品と見られる。

(4) 包含層 (第43・44図)

A区の北東隅、D-4・5グリッドで、南北約2.8m、東西約4mの範囲から縄文時代早期末葉を中心とした土器が出土した。

1~14は早期末葉の条痕文系土器群である。

1は緩やかに開く口縁部文様帯分の破片で、口縁部は現存しない。文様帯下端を平行沈線で横位区画し、文様帯内に平行沈線の斜格子目文を描いている。平行沈線は、半截竹管状工具を器面に対



第44図 包含層出土遺物

して斜めに当てて施文することから、片方が深く施文されている。格子目文は右傾を始めに、左傾を後から施文されている。暗赤褐色を呈し、白色粒子と繊維を少量含み、裏面には微かな条痕整形が施されている。4は1と同種の平行沈線をやや左傾して施文し、胎土に繊維を少量含む。器面が荒れているため、条痕整形は不明瞭である。

2・3は口縁部文様帯を横位の沈線で区画する土器群で、器形に段部は見られない。2は植物の茎状の工具で、角状沈線に近い短沈線で口縁部文様帯下端部を区画する。3は径の大きな深鉢の

口縁部破片で、幅狭な口縁部文様帯を半截竹管状工具による浅い平行沈線で横位区画する。両者とも器面の荒れが目立ち、整形痕は不明瞭である。3の内面には指頭整形痕が残っている。両者とも繊維を比較的多く含んでいる。

5は幅狭の口縁部文様帯を若干肥厚させて段状に成形し、不明瞭であるが条の太い単節RL縄文を施文している。繊維を若干含み、擦痕状の整形を施している。

5～14は胴部破片で、繊維を少量含み条痕状整形や擦痕状整形を施すものが多い。擦痕状整形で

は6・13・14のように撫で状のもの、条痕状整形では7・12のように細かなもの、8～11のように粗いものがある。

以上、早期末葉の土器群は、器形や文様帯構成等から、茅山上層式に比定されるものと思われる。

14・15は中期後葉の土器群で、15は無文土器である。16は加曾利E式の口縁部文帯の破片で、隆帯による区画を施している。加曾利EⅡ式に比定されるものと思われる。

(5) グリッド出土遺物 (第45図)

第2次調査では、縄文時代早期から中期の土器が出土した。分類はⅣ-1に従う。

第Ⅰ群 (第45図1～3)

早期前半の土器を本群とした。

第1類 (第45図1)

撚糸文土器を本類とした。撚糸Rが縦位に施文されている。

第2類 (第45図2)

沈線文土器を本類とした。幅狭い沈線が斜位に交差するように施文されている。

第3類 (第45図3)

多条のR/L原体が施文された土器である。無織維で、胎土は第2類に近い。

第Ⅱ群 (第45図4～27)

早期条痕文系土器を本群とした。第2次調査では、第1・2類は出土しなかった。

第3類 (第45図4～27)

文様を持たない、条痕文のみの土器を本類とした。4～8は口縁部破片で、4は口唇上にも条痕が施されている。7は波状口縁である。27は底部直上の破片と思われる。

第Ⅳ群 (第45図28～29)

黒浜式土器を本群とした。第2次調査では、第1類は出土しなかった。

第2類 (第45図28)

縄文のみの破片である。胎土には繊維を含んで

いる。

第3類 (第45図29)

胴下部から底部にかけての破片である。上げ底状で、底面に縄文は施されないようである。推定底径7.2cm、現存高9.5cmである。

第Ⅴ群 (第45図30～34)

諸磯式土器を本群とした。第2次調査では、第1～3類は出土しなかった。

第4類 (第45図30～31)

沈線文の土器である。30は前期末葉の可能性が

第5類 (第45図32～33)

縄文のみの破片を本類とした。

第6類 (第45図34)

胴下部から底部の破片である。小型の深鉢形土器で、器面には粗く縄文が施文されている。推定底径5.6cm、現存高6.6cmである。

第Ⅵ群 (第45図35～39)

中期の土器を本群とした。第2次調査では、第1類は出土しなかった。

第2類 (第45図35)

口唇部が角頭状となる無文の土器で、鉢形と考えられる。

第3類 (第45図36)

加曾利E式の口縁部破片である。区画文の一部が、鈎状に突出している。

第4類 (第45図37)

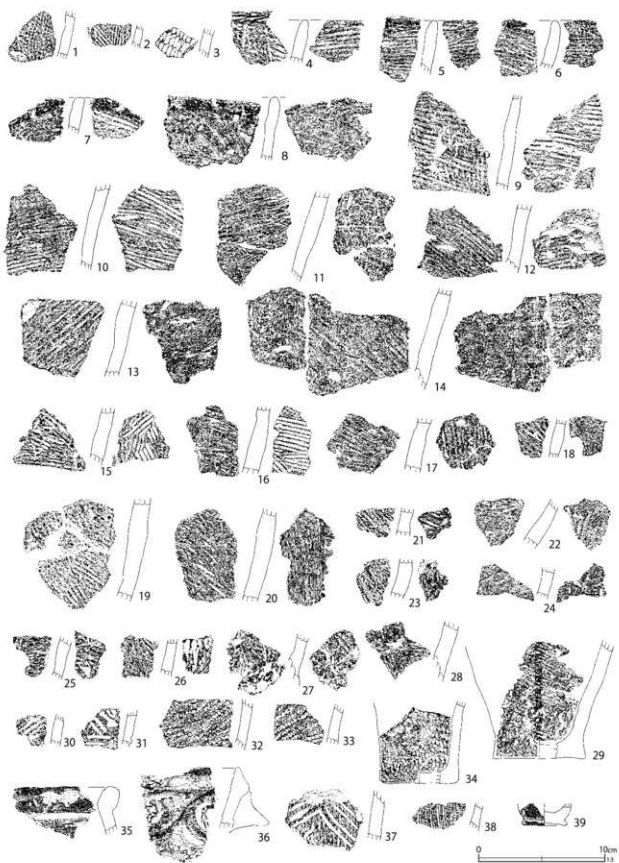
連弧文土器を本類とした。1点のみの出土である。条線地文上に、半截竹管により、横位の連弧文が描かれ、縦位にも蛇行懸垂文が描かれている。

第5類 (第45図38)

条線のみの破片で、第4類の可能性もある。

第6類 (第45図39)

ミニチュア土器の底部である。底面が上げ底状となる。推定底径3.6cm、現存高1.7cmである。



第45図 グリッド出土遺物

2. 平安時代

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第46・47図)

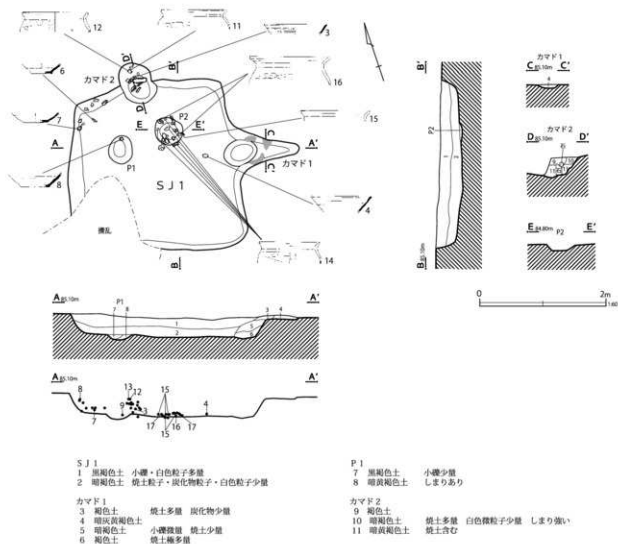
A区の南端、D・E-3グリッドに位置する。平面形態は方形で、規模は東西2.6m、南北2.67mを測る。検出面からの深さは0.34~0.4mである。床面は概ね平坦で、標高は84.8m前後を測る。床面にピットが2基検出された。いずれも直径0.45m程度で、深さ0.07~0.1mを測る。機能は不明である。

カマドは、2基検出された。

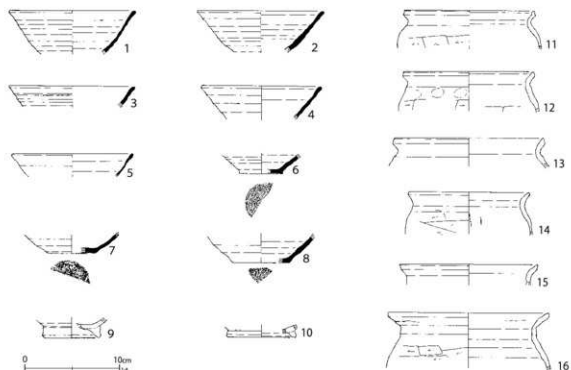
カマド1は東壁の中央部に設けられていた。壁

際に燃焼部の中心を配し、外方へ煙道部が延びる。袖部は検出されなかった。規模は全長0.96m、幅0.92mである。煙道部には部分的に焼土が認められた。燃焼部の奥壁の立ち上がりは高く、煙道部との境に明確な段差をもつ。煙道部は残存長0.5m、最大幅0.4mである。先端の煙出しに向かって、幅が狭くなっている。

カマド2は、北壁を切り込んで構築された燃焼部が検出された。平面形態は楕円形で、長さ0.68m、幅0.5mである。袖部及び煙道部は検出されなかった。



第46図 第1号住居跡



第47図 第1号住居跡出土遺物

第13表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(13.3)	[4.6]	—	I	75	普通	浅黄	東金子産	26・4 27・1
2	須恵器	坏	(13.4)	[4.4]	—	I	20	良好	灰	東金子産	
3	須恵器	坏	(13.3)	[2.2]	—	I K	10	良好	灰	東金子産 カマド2	
4	須恵器	坏	(12.6)	[3.5]	—	I K	15	良好	黄灰	東金子産	
5	須恵器	坏	(12.7)	[2.4]	—	I J K	5	普通	灰白	南比企産	
6	須恵器	坏	—	[2.1]	(4.7)	I	30	良好	灰	東金子産	
7	須恵器	坏	—	[2.3]	(5.2)	I J	35	不良	橙	南比企産	
8	須恵器	坏	—	[3.1]	(5.9)	I	20	良好	灰	東金子産	
9	ロクロ土師器	高台付坏	—	[2.2]	(5.8)	H I K	20	不良	灰白	カマド2	
10	ロクロ土師器	高台付坏	—	[1.4]	(7.2)	A H I K	10	不良	浅黄		
11	土師器	甕	(13.6)	[4.0]	—	I	20	普通	灰褐	カマド2	27・2
12	土師器	小型甕	(13.7)	[4.2]	—	I	20	普通	灰褐	P2	26・5
13	土師器	甕	(15.7)	[3.2]	—	I K	5	普通	にじみ褐	カマド2	26・6
14	土師器	小型甕	(12.6)	[4.5]	—	I	50	普通	明褐		
15	土師器	甕	(14.6)	[2.2]	—	I J	5	普通	にじみ褐	カマド2	26・7
16	土師器	甕	(17.0)	[5.9]	—	I	15	普通	にじみ褐		

燃烧部の中央部に長さ10～20cm前後の礫が散乱していた。被熱したものもあり、支脚やカマドの構築材として用いられたものと推定される。長尺の礫を支脚と仮定すると、カマドの架け口は、住居の壁のラインと合致する。

カマドの新旧関係は明確でないが、カマド2付

近からは遺物が多く出土し、これが住居廃絶時の状態を示しているとすれば、カマド2がカマド1よりも新しい可能性が高い。

遺物は、大半が住居内北西隅と中央やや北東寄りの位置で検出された。須恵器やロクロ土師器、土師器甕が出土した。

3. 近世

(1) 土壌

土壌はA区で18基、B区で31基検出された(第48～53図)。調査区に広く分布している。

各土壌の概要は第14表に示し、出土遺物は第54～55図に示した。

平面形態は円形・楕円形・隅丸長方形・不整形など多様である。

覆土は、黒褐色土や暗褐色土など褐色系の土を主体とし、ロームブロック・炭化物などを含んでいる。

出土遺物は少ないが、近世陶磁器や和釘などが出土した。年代的には、17世紀後半を上限とし、18～19世紀のものが多く見られる。

土壌は、形態・規模とも多様で、出土遺物も少ないため、用途や性格を特定できない。

第29号土壌 (第51・54図)

O-8グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。

遺物は、1が堺・明石系陶器播鉢の口縁部付近の破片である。2は、瀬戸・美濃系陶器播鉢の体部の破片である。いずれも内面に播目が刻まれている。図示した他に、肥前系磁器碗が出土した。

第31号土壌 (第51・54図)

O-8・9グリッドに位置する。平面形態は長方形と想定され、南側は調査区外に続いている。

遺物は、3が、土師質土器の火鉢である。胎土に雲母や長石・石英を含み、三河産と考えられる。第60図7とよく似る。粘土板を貼り合わせて成形され、剥離面には数条の沈線が認められる。粘土板どうしの接着をよくするための細工である。6は肥前系陶器の埴である。

第33号土壌 (第51・54図)

N・O-8グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。

遺物は、5が堺・明石系陶器播鉢の底部付近で

ある。体部内面に播目が刻まれている。11は陶器の湯たんぽである。図示した他に、瀬戸・美濃系陶器鉢、瓦質土器埴、肥前系磁器碗が出土した。

第43号土壌 (第52・55図)

N-6グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。第42号土壌よりも新しい。

遺物は、鉄釘が出土した。第55図1・2とも横断面が方形を呈し、和釘と見られる。

第50号土壌 (第52・54図)

O-8グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形である。

遺物は、7が肥前系磁器の小碗である。内外面施釉で、外面染付である。図示した他に、瀬戸・美濃系磁器碗、土師質土器の焙烙が出土した。

第51号土壌 (第52・54図)

N-8グリッドに位置する。第4号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。遺構の東側は調査区域外に続くが、平面形態は隅丸長方形を呈すると見られる。

遺物は、8が肥前系磁器碗である。内外面施釉で、外面染付である。高台下端部には畳付砂が付着している。10は瓦質土器の焙烙である。

第56号土壌 (第53・54図)

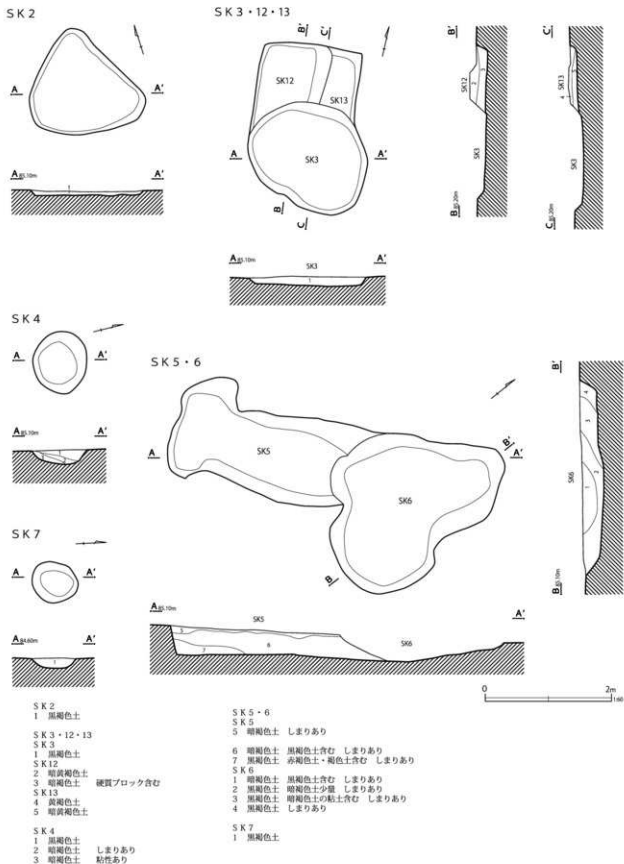
N・O-6グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。

遺物は、9が瓦質土器の火鉢である。脚部外面にミガキが施されている。図示した他に、志戸呂産陶器灯明皿が出土した。

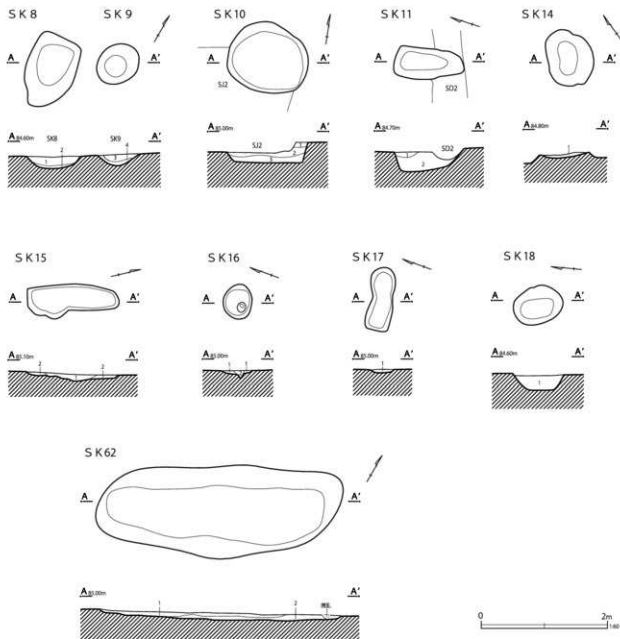
第58号土壌 (第53・54図)

P-5グリッドに位置する。平面形態は不整形である。

遺物は、4が堺・明石系陶器播鉢である。口縁部の破片であり、内面に播目が認められる。



第48図 土壌 (1)



SK8・9
SK8
1 黒褐色土
2 暗褐色土
SK9
1 黒褐色土 暗褐色土少量
4 暗褐色土

SK10
1 褐色土
2 暗褐色土 褐色土含む
3 黒褐色土 砂利微量

SK11
1 褐色土 砂利少量
2 暗褐色土 褐色土含む 砂利・炭化物少量

SK14
1 黒褐色土 焼土・炭化物含む 硬質

SK15
1 黒褐色土 白色微粒子多量
2 暗黄褐色土

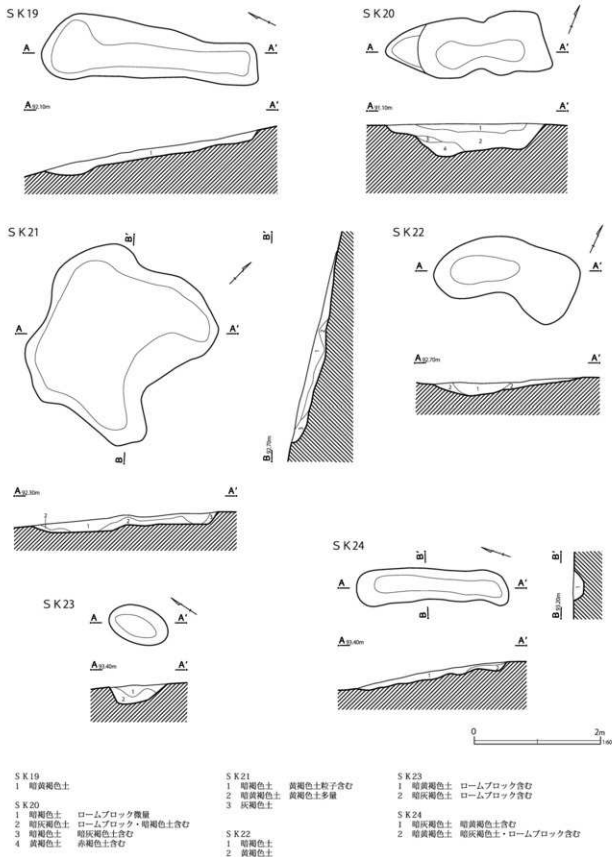
SK16
1 暗褐色土
2 暗褐色土

SK17
1 褐色土

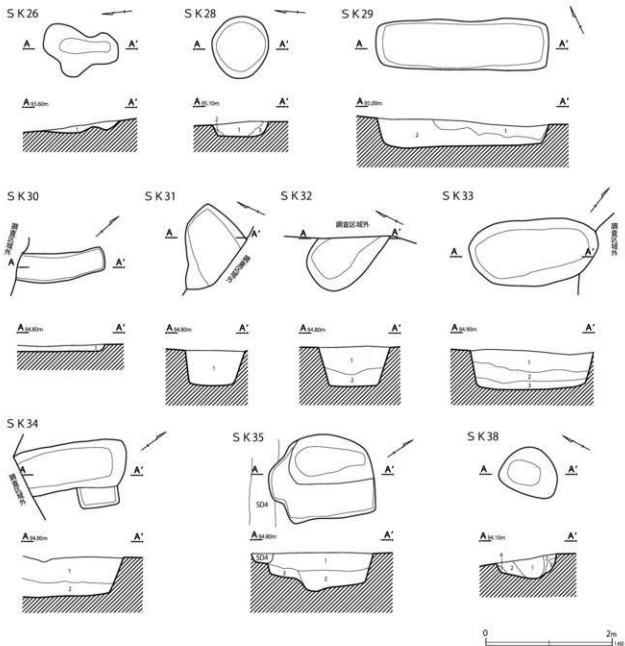
SK18
1 灰褐色土 褐色土小ブロック多量

SK62
1 白色微粒子微量 しまりあり
2 灰黄褐色土 黄褐色土微粒子微量 しまり強い

第49図 土壌 (2)



第50図 土壌 (3)



S K 26
1 灰褐色土 灰褐色土含む

S K 28
1 暗灰褐色土 暗黄褐色土含む
2 暗黄褐色土
3 暗黄褐色土 暗灰褐色土・ロームブロック含む

S K 29
1 黄褐色土 黄褐色土粒子含む
2 黒褐色土 黄褐色土粒子・ロームブロック含む

S K 30
1 暗灰褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む

S K 31
1 黒褐色土 黄褐色土粒子含む

S K 32
1 暗黄褐色土 黄褐色土粒子・ロームブロック含む
2 黒褐色土 黄褐色土粒子含む

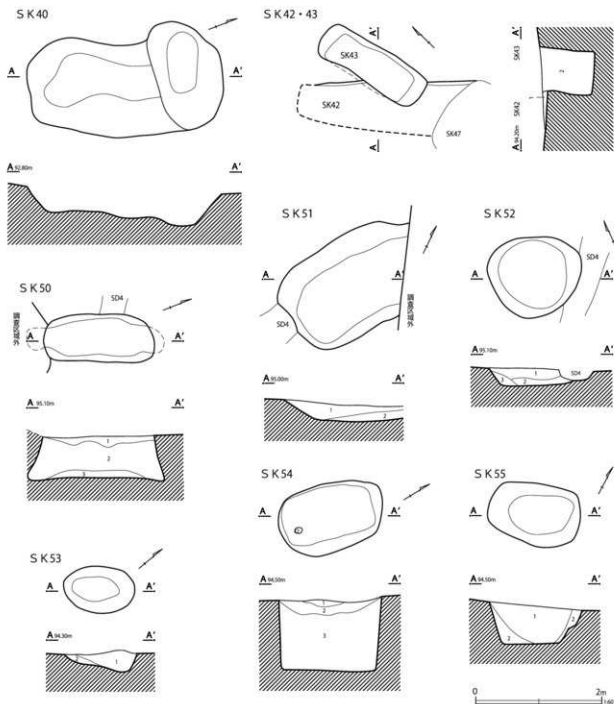
S K 33
1 黄褐色土 黄褐色土粒子含む
2 黒褐色土 黄褐色土粒子・ロームブロック含む
3 黒褐色土

S K 34
1 黄褐色土 黄褐色土粒子・ロームブロック含む
2 黒褐色土 ロームブロック含む

S K 35
1 暗黄褐色土 黄褐色土粒子・ロームブロック含む
2 黒褐色土 ロームブロック・黄褐色土粒子含む
3 黒褐色土 ローム粒子・黄褐色土粒子含む

S K 38
1 黒褐色土
2 灰黄褐色土
3 暗黄褐色土
4 黄褐色土 しまりなし

第51図 土壌 (4)



S K42・43

S K42 1 黒褐色土 黄褐色土多量

S K43 2 黒褐色土 黄褐色土粒子多量

S K50

1 暗褐色土 黄褐色土粒子多量 しまりあり

2 暗褐色土 黄褐色土粒子少量 しまりなし

3 淡褐色土 しまりあり

S K51

1 暗褐色土 黄褐色土多量

2 黒褐色土

S K52 1 ローム粒子含む 黄褐色土多量

2 暗褐色土 黄褐色土粒子多量

3 暗褐色土

S K53 1 暗黄褐色土 ローム粒子含む

2 黄褐色土

S K54

1 暗灰褐色土 ロームブロック・焼土含む

しまりあり

2 暗灰褐色土 黄褐色土粒子・焼土含む

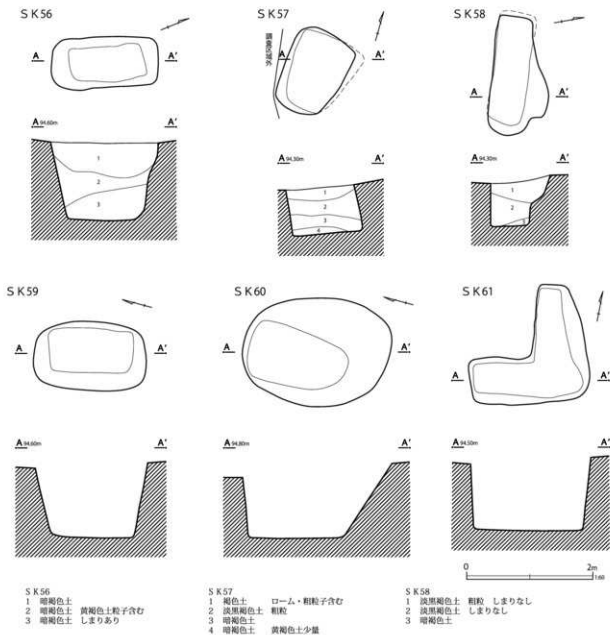
3 暗褐色土 黄褐色土粒子含む

S K55

1 黒褐色土 ロームブロック含む

2 暗褐色土 ロームブロック含む

第52図 土坑 (5)



第53図 土坑 (6)

第14表 土坑一覧表 (第48~53図)

遺構名	時期	グリッド	平面形	長軸方位	長軸	短軸	深さ	重複	備考
第2号土坑	近世	C-3	不整形	N-77° -W	1.82	1.68	0.09		A区
第3号土坑	近世	D-2・3	円形	N-78° -E	1.83	1.72	0.15	SK12 (IH) SK13 (IH)	A区
第4号土坑	近世	D-3	円形	N-85° -W	1.10	0.85	0.22		A区
第5号土坑	近世	C-3	不整形	N-51° -E	2.60	1.40	0.47	SK6	A区
第6号土坑	近世	C-3・4	不整形	N-1° -E	3.07	2.02	0.38	SK5	A区
第7号土坑	近世	D-5	円形	N-3° -W	0.73	0.66	0.16		A区
第8号土坑	近世	D-5	楕円形	N-2° -W	0.80	1.19	0.20		A区
第9号土坑	近世	D-5	円形	N-23° -E	0.72	0.59	0.18		A区
第10号土坑	近世	C-2	円形	N-85° -E	1.28	1.13	0.33	SJ2 (新)	A区

遺構名	時期	グリッド	平面形	長軸方位	長軸	短軸	深さ	重複	備考
第11号土壌	近世	B-3	円形	N-10°-W	1.10	0.50	0.31	SD2(新)	A区
第12号土壌	近世	C・D-2・3	不整形	N-1°-W	(1.10)	(1.07)	0.17	SK3(新) SK13	A区
第13号土壌	近世	C・D-2・3	隅丸長方形	N-2°-W	(0.92)	(0.52)	0.10	SK3(新) SK12	A区
第14号土壌	近世	C-2	楕円形	N-21°-E	0.92	0.70	0.25	SD1(新)	A区
第15号土壌	近世	D-3	不整形	N-13°-E	1.43	0.54 0.42	0.14		A区
第16号土壌	近世	D-2	円形	N-73°-E	0.55	0.45 0.06 (0.13)			A区
第17号土壌	近世	D-2	不整形	N-77°-E	1.01	0.40 0.06			A区
第18号土壌	近世	D-5	楕円形	N-50°-W	0.72	(0.60) 0.26			A区
第19号土壌	近世	L・M-5	不整形	N-23°-W	3.35	0.85 0.21~0.70			B区
第20号土壌	近世	K-6	不整形	N-62°-E	2.50	0.92 0.96 0.38~0.61			B区
第21号土壌	近世	L・M-5	不整形	N-51°-W	3.15	3.05 0.20~0.67			B区
第22号土壌	近世	L-6・7	不整形	N-65°-E	2.30	0.90 1.17 0.08~0.30			B区
第23号土壌	近世	L-7	楕円形	N-7°-W	0.92	0.57 0.32			B区
第24号土壌	近世	L-6・7	不整形	N-20°-W	2.35	0.50 0.13~0.45			B区
第26号土壌	近世	L-7	不整形	N-15°-E	1.19	0.50 0.75 0.15~0.20			B区
第28号土壌	近世	N-8	円形	N-3°-W	0.98	0.88 0.25			B区
第29号土壌	近世	O-8	隅丸長方形	N-65°-W	2.70	0.78 0.45			B区
第30号土壌	近世	O-8	隅丸長方形	N-34°-E	(0.88) 0.45 0.10				B区
第31号土壌	近世	O-8・9	長方形	N-31°-E	1.10	(0.95) 0.55			B区
第32号土壌	近世	N-8	隅丸長方形	N-70°-W	(1.02) 0.88 0.63				B区
第33号土壌	近世	N・O-8	隅丸長方形	N-47°-E	1.99	1.05 0.61			B区
第34号土壌	近世	O-8	不整形	N-23°-E	(1.67) 0.70 1.05 0.65				B区
第35号土壌	近世	N・O-8	不整形	N-28°-E	1.65	1.33 0.38~0.60		SD4(新)	B区
第38号土壌	近世	M-6	楕円形	N-30°-W	0.90	0.77 0.40			B区
第40号土壌	近世	M-5	不整形	N-20°-E	3.05	0.72 1.45 0.47~0.61			B区
第42号土壌	近世	N-6	隅丸長方形	N-40°-W	(2.23) 0.75 0.03~0.08			SK43(新) SK47(旧)	B区
第43号土壌	近世	N-6	隅丸長方形	N-13°-W	1.80	0.60 0.78		SK42(旧)	B区
第50号土壌	近世	O-8	隅丸長方形	N-21°-E	1.75	0.75 0.66		SD4(旧)	B区
第51号土壌	近世	N-8	隅丸長方形か	N-65°-E	(2.10) 1.48 0.36			SD4(旧)	B区
第52号土壌	近世	N-8	円形	N-68°-W	1.40	1.38 0.30		SD4(新)	B区
第53号土壌	近世	O-5	楕円形	N-38°-E	1.10	0.75 0.18~0.29			B区
第54号土壌	近世	N・O-6	隅丸長方形	N-17°-E	1.66	1.08 1.17			B区
第55号土壌	近世	O-5・6	長楕円形	N-73°-E	1.46	0.96 0.69			B区
第56号土壌	近世	N・O-6	隅丸長方形	N-22°-E	1.67	0.80 1.26			B区
第57号土壌	近世	P-5	隅丸長方形	N-16°-E	1.35	0.95 0.78			B区
第58号土壌	近世	P-5	不整形	N-74°-W	1.38	0.60 0.82 0.81			B区
第59号土壌	近世	N-6	隅丸長方形	N-16°-W	1.75	1.10 1.16			B区
第60号土壌	近世	N-6	楕円形	N-16°-W	2.32	1.70 1.18			B区
第61号土壌	近世	N-6	逆L字	N-78°-E N-10°-W	1.87	0.75 1.85 1.15			B区
第62号土壌	近世	D-3	不整形	N-60°-E	3.78	1.43 0.18			A区

(2) 溝跡

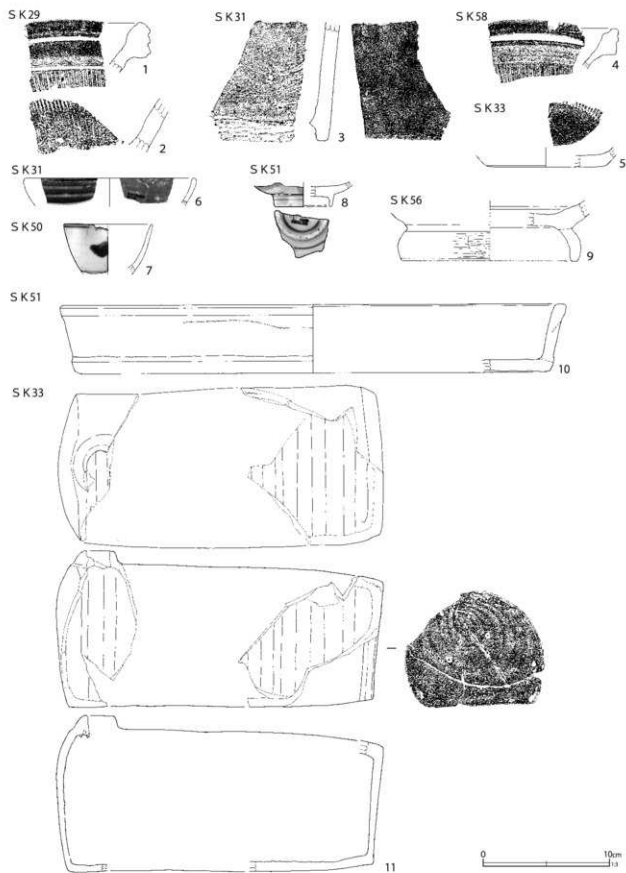
溝跡はA区で3条、B区で1条検出された(第56・57図)。各溝跡の概要は第17表に示した。

遺物は出土しなかったが、覆土の特徴等から、近世と判断した。

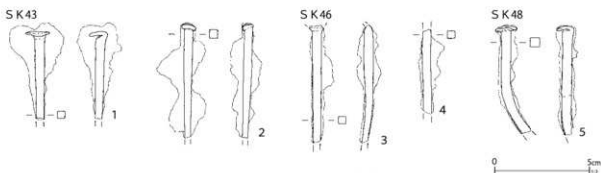
上面が削平されているため、遺構の残存状態は

良好でなく、平面形態が判然としないものもある。
第1号溝跡は、複数の溝跡が重複したものかもしれない。

溝跡にはL字状に屈曲するものがあり、溝跡は、区画や排水のために掘削されたと考えられる。



第54図 土曜出土遺物 (1)



第55図 土壌出土遺物 (2)

第15表 土壌出土遺物観察表 (第54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	罎鉢	—	[4.0]	—	DEIK	10	良好	黒・明石系	SK29 19世紀 埴・明石系 内面描目	28・1
2	陶器	罎鉢	—	[4.3]	—	D	15	普通	浅黄	SK29 18世紀 瀬戸・美濃系 内面描目 鉄軸	28・1
3	土師質土器	火鉢	—	[9.3]	—	ADE	—	普通	黒・明石系	SK31 19世紀以降 三河産	28・1
4	陶器	罎鉢	—	[3.2]	—	DEI	5	普通	黒褐	SK58 19世紀 埴・明石系 内面描目	28・1
5	陶器	罎鉢	—	[1.6]	(9.6)	DK	5	普通	明赤褐	SK33 19世紀 埴・明石系 内面描目	28・1
6	陶器	埴	(13.3)	[2.2]	—	I	15	普通	灰オリーブ	SK31 18世紀前半 肥前系 内外面施軸	28・1
7	磁器	小碗	(6.9)	[3.9]	—	—	20	普通	白	SK50 19世紀中 肥前系 内外面施軸 外面染付	28・1
8	磁器	碗	—	[1.9]	(4.5)	—	40	良好	白	SK51 18世紀前 肥前系 内外面施軸 外面染付	28・1
9	瓦質土器	火鉢	—	[4.8]	(13.9)	CIJ	40	普通	黄灰	SK56 19世紀以降	—
10	瓦質土器	焙烙	(39.4)	5.4	(37.4)	—	15	普通	黒褐	SK51 18世紀頃か	—
11	陶器	湯たんぽ	—	11.2	—	IK	—	普通	黒	SK33 SK34 O・8G 笠間系 鉄軸	27・5

第16表 土壌出土鉄製品観察表 (第55図)

番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	図版
1	鉄製品	釘	[4.7]	0.40	0.40	11.3	SK43	27・6
2	鉄製品	釘	[6.0]	0.45	0.45	10.3	SK43	27・6
3	鉄製品	釘	[6.2]	0.40	0.40	7.3	SK46	27・6
4	鉄製品	棒状品	[4.4]	0.40	0.40	3.8	SK46	27・6
5	鉄製品	釘	[6.0]	0.50	0.50	8.3	SK48	27・6

(3) 炭焼窯跡

第1号炭焼窯跡 (第58図)

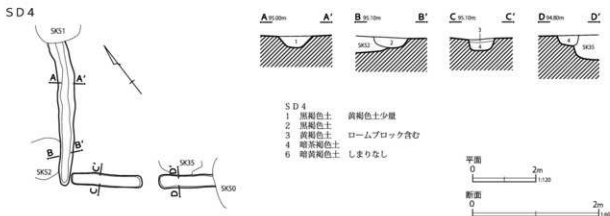
B区の東南部、N-8グリッドに位置する。掘り込みの浅い土壌状の遺構で、底面は船底状である。平面形は楕円形で、規模は長軸が3.47m、幅は最大1.5mである。確認面からの深さは0.35～0.42mである。主軸方位はN-72°-Wを指す。

検出時、掘り込みの内部には炭化物や硬質な粘土塊を含む焼土が堆積していた。焼土を掘り下げたところ、火床面が検出された。

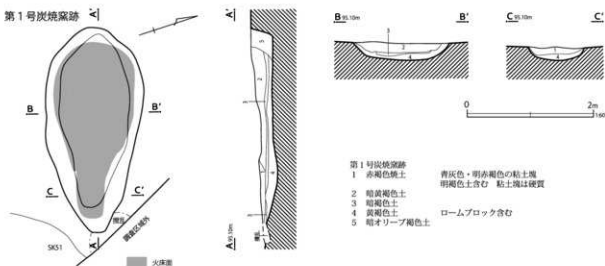
火床面は硬化し、窯壁内面の焼土化も顕著である。被熱の激しさが窺える。火床面の標高は95m前後である。

年代を特定し得る遺物が出土しなかったため、出土した炭化材2点の放射性炭素年代測定を実施した。各試料の暦年校正結果では、19世紀を中心とする年代に相当する測定値が得られた。ここでは、自然科学分析の結果を基に、第1号炭焼窯跡は近世の所産と考えておきたい。

また、炭化材は樹種同定も合わせて実施した。その結果、クリとコナラ属クスギ節・ハンノキ属ハンノキ亜属と異なる樹種と確認され、樹種の選択は行われていないようである。いずれも二次林的な要素のある広葉樹であり、身近に生育していた樹木が木炭の原料として利用されたことが窺える。



第57図 溝跡 (2)



第58図 第1号炭焼窯跡

第17表 溝跡一覧表 (第56・57図)

遺構名	時期	グリッド	走行方位	長さ	幅	深さ	重複	備考
第1号溝跡	近世	B-2・3 C-1・2	N-10°-E N-60°-E	18.25	1.12~2.54	0.18~0.54	SK14(II)	A区
第2号溝跡	近世	B-2~4	N-75°-E	(16.57)	0.57~0.64	0.09~0.29	SK11(II)	A区
第3号溝跡	近世	D-E-1	N-21°-W	3.29	0.90~1.52	0.02~0.14		A区
第4号溝跡	近世	N-O-8	N-36°-E N-49°-W	(8.75)	0.39~0.52	0.19~0.20	SK35(II) SK50(新) SK51(新) SK52(II)	B区

(4) グリッド出土遺物 (第59図)

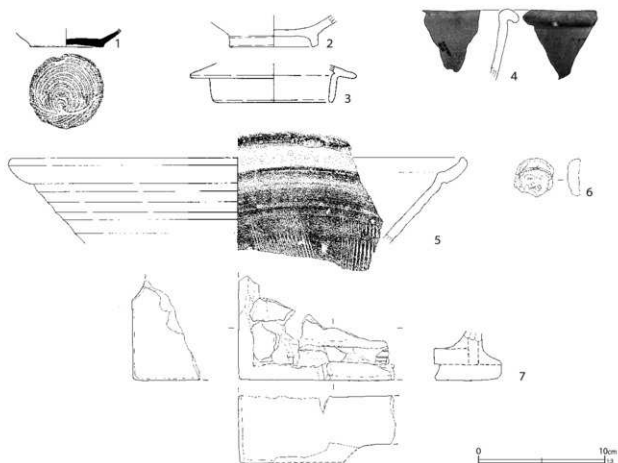
1は須恵器の坏である。底部外面に糸切痕が明瞭に残る。平安時代の遺物である。

2は瀬戸・美濃系陶器の片口鉢と見られる。内面のみ施釉されている。

3は陶器の土版の蓋である。

4は瀬戸・美濃系陶器の鉢である。内外面に灰釉が施されている。外面は被熱し、器面が荒れている。

5は瀬戸・美濃系陶器の擂鉢である。内外面に



第59図 グリッド出土遺物

第18表 グリッド出土遺物観察表 (第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	—	[1.5]	5.8	I K	90	普通	橙		
2	陶器	片口鉢	—	[2.5]	6.4	I	90	普通	灰白	O-8G 瀬戸・美濃系 内面灰釉	
3	陶器	土瓶蓋	—	(2.3)	(7.2)	K	15	良好	灰黄	地方窯系 上面糖白釉施軸	28-2
4	陶器	鉢	—	[5.7]	—	K	10	普通	灰白	瀬戸・美濃系 内外面灰釉 外面被熱	28-2
5	陶器	搥鉢	(35.4)	[6.8]	—	—	15	普通	にじみ	O-8G 18世紀 瀬戸・美濃系 内外面鉄釉	28-2
6	土製品	泥面子	—	—	—	E	100	普通	橙		28-2
7	土師質土器	火鉢	—	[5.4]	—	A D E	—	普通	にじみ	O-8G 19世紀以降 三河産	28-3

鉄釉が施されている。

6は泥面子である。七福神の大黒天と思われる顔面が作り出されている。

7は三河産の土師質土器火鉢である。粘土板を貼り合わせて成形されており、接合面には数条の沈線が施されている。

VI 自然科学分析

天神峯遺跡の第2次調査において、第1号炭焼窯跡から木炭の残流と考えられる炭化材が出土した。そこで、炭焼窯跡の稼働年代の推定と薪炭生

産における樹種選択の解明を目的として、炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定を委託・実施した。

1. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

埼玉県日高市の天神峯遺跡第2次調査において出土した炭化材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、第1号炭焼窯跡から出土した炭化材2点である。どちらも最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

測定試料の情報、調製データは第19表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

第20表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第60図に暦年較正結果をそれぞれ示した。暦年較正に用いた年代値は下1桁

を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はA D 1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期5730 $\pm$ 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13、暦年較正結果が1950年以降にのびる試料についてはPost-bomb atmospheric NH2)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、

第19表 測定試料および処理

遺跡データ	測定番号	試料データ	前処理
第1号炭焼窯跡 試料No.1	PLD-32293	種類:炭化材(ハンノキ属ハンノキ亜属) 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
第1号炭焼窯跡 試料No.2	PLD-32294	種類:炭化材(コナラ属クスギ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)

OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

4. 考察

以下、各試料の暦年校正結果のうち2 σ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、結果を整理する。

試料1は、1669-1699 cal AD (15.3%)、1720-1780 cal AD (32.6%)、1798-1818 cal AD (11.0%)、1833-1880 cal AD (16.4%)、1915-1944 cal AD (18.4%)、1951-1954 cal AD (1.8%)であった。これは、17世紀後半～末、18世紀前半～19世紀後半、20世紀前

半～中頃で、江戸時代前期～昭和時代に相当する。

試料2は、1684-1732 cal AD (27.2%)、1807-1893 cal AD (56.4%)、1905-1928 cal AD (11.6%)、1954-1954 cal AD (0.3%)であった。これは、17世紀後半～18世紀前半、19世紀初頭～末、20世紀初頭～中頃で、江戸時代前期～昭和時代に相当する。

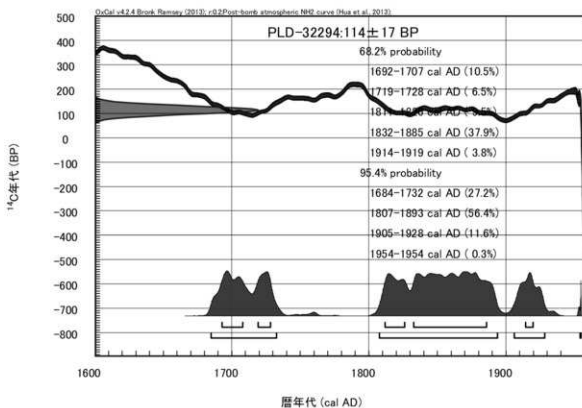
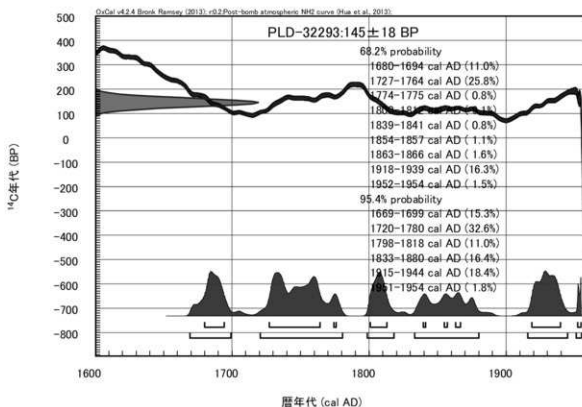
木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、どちらも最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果が古木効果の影響を受け、木材が枯死もしくは伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。

第20表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

試料	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
試料1	PLD-32293	-28.76 ± 0.20	145 ± 18	145 ± 20	Post-bomb NH2 2013: 1680-1694 cal AD (11.0%) 1727-1764 cal AD (25.8%) 1774-1775 cal AD (0.8%) 1800-1812 cal AD (9.1%) 1839-1841 cal AD (0.8%) 1854-1857 cal AD (1.1%) 1863-1866 cal AD (1.6%) 1918-1939 cal AD (16.3%) 1952-1954 cal AD (1.5%)	Post-bomb NH2 2013: 1669-1699 cal AD (15.3%) 1720-1780 cal AD (32.6%) 1798-1818 cal AD (11.0%) 1833-1880 cal AD (16.4%) 1915-1944 cal AD (18.4%) 1951-1954 cal AD (1.8%)
					Post-bomb NH2 2013: 1692-1707 cal AD (10.5%) 1719-1728 cal AD (6.5%) 1811-1826 cal AD (9.5%) 1832-1885 cal AD (37.9%) 1914-1919 cal AD (3.8%)	Post-bomb NH2 2013: 1684-1732 cal AD (27.2%) 1807-1893 cal AD (56.4%) 1905-1928 cal AD (11.6%) 1954-1954 cal AD (0.3%)

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- Hua, Q., Barbetti, M., Rakowski, A.Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. Radiocarbon, 55 (4), 1-14.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.



第60図 暦年校正年代グラフ

2. 樹種同定

1. はじめに

日高市に所在する天神峯遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている。

2. 試料と方法

試料は、第1号炭焼窯跡から出土した炭化材2点である。ただし、1試料内に複数樹種が確認されたため、分析点数は3点となった。遺構の時期は、調査所見から近世と推測されている。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、広葉樹のクリとコナラ属クスギ節(以下、クスギ節)、ハンノキ属ハンノキ亜属(以下、ハンノキ亜属)の3分類群が確認された。試料の形状は、3点とも破片であった。結果の一覧を第21表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を第61図に示す。

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc.
ブナ科 第61図 1a-1c (サンプル2-2)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に単列である。

第21表 樹種同定結果

遺構	No.	樹種	形状	サイズ	年輪数	年代測定番号
第1号炭焼窯跡	サンプル1	ハンノキ属ハンノキ亜属	破片	1.5cm角	4	PLD-32293
	サンプル2-1	コナラ属クスギ節	破片	<3cm角	4	PLD-32294
	サンプル2-2	クリ	破片	<1cm角	3	—

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(2) コナラ属クスギ節 *Quercus* sect. *Aegilops*
ブナ科 第61図 2a-2c (サンプル2-1)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

クスギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クスギとアベマキがある。材は重硬および強靱で、加工困難である。

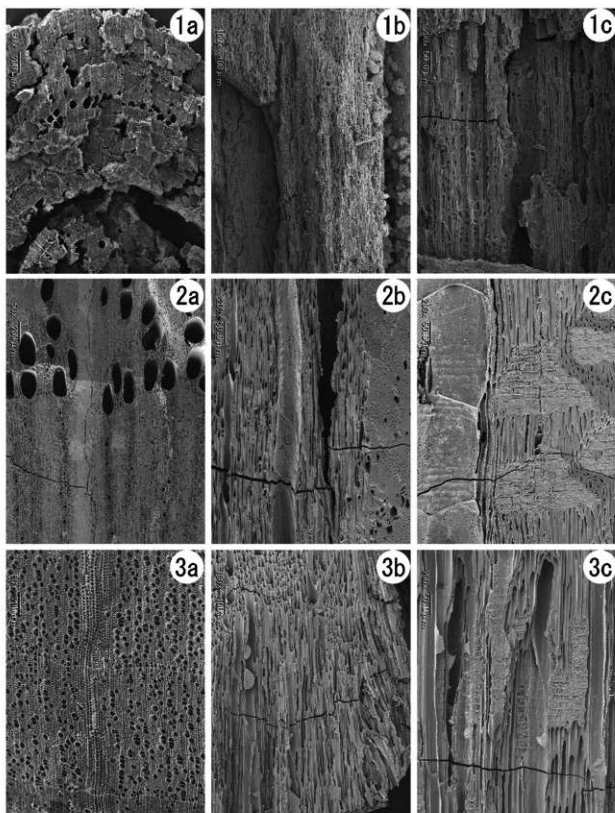
(3) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus* カバノキ科 第61図 3a-3c (サンプル1)

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。道管の穿孔は10-20段程度の階段状である。放射組織は単列同性で、集合放射組織が存在する。

ハンノキ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ハンノキやヤマハンノキなど7種がある。材は全般に硬さおよび重さの中庸で、加工は容易である。

4. 考察

試料は木炭の残渣であると考えられる。近世における燃料材は、マツ属がやや多いものの、比較的多様な樹種が利用される傾向がある(伊東・山田編2012)。今回の分析でもハンノキ亜属とクスギ節、クリの3分類群が確認されており、樹種の



1a-1c. クリ (サンプル2-2)、2a-2c. コナラ属クスギ節 (サンプル2-1)、3a-3c. ハンノキ属ハンノキ亜属 (サンプル1)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第61図 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

選択は行われていなかった可能性がある。また、生育していた樹木が木炭として利用されたと推測
いずれも二次林的な要素のある広葉樹で、身近にされる。

引用・参考文献

平井信二（1996）木の大本科。394p，朝倉書店。

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—。449p，海青社。

VII 調査のまとめ

発掘調査の成果からみた天神峯遺跡

天神峯遺跡は従前、縄文時代中期及び奈良時代の集落跡として周知されていた。今回の発掘調査の結果、縄文時代早期～中期・平安時代・近世の遺構が検出され、縄文時代から近世に及ぶ複合遺跡であることが明らかになった。

縄文時代

縄文時代の遺構は、住居跡・集石土壇・炉穴・土壇が検出された。

天神峯遺跡では早期の土器が出土し、検出例の乏しいこの地域では貴重な発見となった。第1次調査第5号土壇からは早期末、打越式期の尖底羽状縄文土器が出土した。関東では、東京都の向山遺跡に類例が知られているが、最も類似する資料は、長野県のほうろく屋敷遺跡に見られる（金子他2010）。

住居跡は、出土した遺物から時期的に降る前期～中期の所産と見られる。

天神峯遺跡が所在する日高市周辺では、中期中葉から後葉にかけて、遺跡数が急激に増加することが知られている。当地域において、天神峯遺跡は確認例の少ない早期～前期の遺跡として貴重であるとともに、中期に向けて隆興していく、その前史を明らかにする上でも重要な遺跡といえよう。

平安時代

平安時代の遺構は、住居跡と焼土跡である。住居跡は、出土遺物の特徴から8世紀末～9世紀末頃と考えられる。

調査範囲が限られているが、少数の住居跡の分布状況や丘陵斜面という遺跡の立地からみて、平安時代の集落はきわめて小規模であった可能性が高い。

検出された4軒の住居跡のうち、残存状態が悪い第1次調査第5号住居跡を除いた3軒では、第

1次調査第2号住居跡を8世紀末～9世紀初頭、第1次調査第1号住居跡を9世紀後半、第2次調査第1号住居跡を9世紀末に比定することができる。これらの住居跡の配置をみると、居住域が丘陵の南側から北側へ移ったことが窺える。

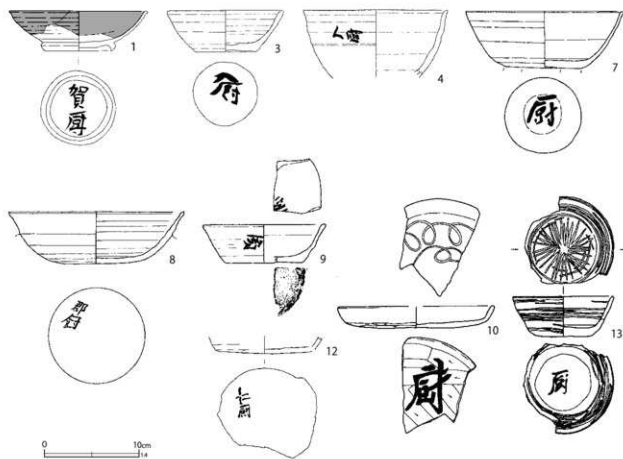
同時期の周辺地域では、天神峯遺跡と同様に、やや標高の高い丘陵斜面や尾根上に集落が営まれた事例が散見される。具体例として、毛呂山町の中尾遺跡や東原遺跡などがある。両遺跡では、8世紀第3四半期及び9世紀第2～3四半期の集落跡が見つっている。集落の成立時期や集落廃絶後の再形成の時期が、近接する大寺庵寺の造営及び伽藍整備を伴う本格的瓦葺き寺院化の時期と対応することから、当該寺院の創建と瓦葺き寺院としての整備に携わった人々の居住地であった可能性が指摘されている（銅持2011a・2011b）。

天神峯遺跡の平安時代集落には、同様の性格を想定できる資料は発見されていないが、当該期の丘陵地の開発には、大寺庵寺など古代寺院の建立といった政治的・社会的動向も関係していた可能性がある。天神峯遺跡の調査成果から窺えた丘陵南斜面から北斜面への居住域の変化は開拓の歩みを反映しているのかもしれない。

近世

近世の遺構は、土壇や溝跡・炭焼窯跡などである。炭焼窯跡は出土した炭化材に対する放射性炭素年代測定の結果、19世紀代の所産と考えられる。天神峯遺跡が所在する平沢地区（旧平沢村）での薪炭生産について「武蔵國郡村誌」には記述がない。しかし、天神峯遺跡から炭焼窯跡が検出されたことは、当地域の薪炭生産を考える上で貴重な発見である。

遺物は土壇を中心に、瀬戸・美濃系の陶器や堺・明石系の陶器、肥前系の磁器などが出土した。出



※ Noは第22表に対応

第62図 武蔵国出土の「厨」黒書土器

第22表 武蔵国出土の主な「厨」黒書土器一覧表 (第62図)

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	釈文	器種	黒書部位	文献
1	天神峯遺跡	日高市	第1次調査 第1号住居跡	賀厨	灰軸陶器碗	底部外面	
2	拾石遺跡	日高市	—	厨	須恵器環	底部外面	飯能市郷土館 2016
3	霞ヶ関遺跡	川越市	69号土壇	入厨	須恵器環	底部外面	川越市教育委員会他 2014
4	霞ヶ関遺跡	川越市	5号溝跡	入厨	須恵器碗	体部外面・ 横位	川越市教育委員会他 2014
5	古海道東遺跡	埼玉県 川越市	2号住居跡	入厨	須恵器環	底部外面	埼玉県教育委員会 2006
6	龍光遺跡	川越市	5号住居跡	厨	須恵器環	底部外面	川越市立博物館 2015
7	西浦遺跡	東松山市	第4号竪穴状遺構	厨	須恵器碗	底部外面	山本他 1997
8	宮地遺跡	狭山市	212号土壇	郡厨	須恵器環	底部外面	狭山市 1986
9	水川神社東遺跡	さいたま市	第10号住居跡	厨	土師器環	体部外面・ 横位	菅森紀巳子 1993
10	将監塚・古井戸遺跡	本庄市	78号竪立柱建物跡	厨	土師器皿	底部外面	赤熊浩一 1988
11	下布田遺跡第36地点	調布市	—	国厨	須恵器環	底部内面	紀野自由 1997
12	姥久保遺跡	日野市	グリッド	仁厨	土師器盤	底部外面	柿沼他 1999
13	御殿前遺跡	東京都 北区	002号棚跡	厨	土師器環	底部外面	東京都北区教育委員会社会 教育課 1988

(大川原 2008 一部加筆)

土量が少なく、各遺構の細かな年代を特定し難いが、17世紀後半を上限として、18～19世紀のもの

が多く見られる。遺構の年代もこの時期が中心となるであろう。

「賀厨」墨書灰釉陶器境について

天神峯遺跡から出土した平安時代の遺物の中で最も注目されるのは、底部外面に「賀厨」墨書を有する灰釉陶器境である。一般に、「厨」関連墨書土器と呼ばれている。

「厨」関連墨書土器には「厨」一字が表記されたものの他に、国・官・政などや郡名などを伴うものが少なくない。「厨」は役所の食事を提供した施設を意味することから、「厨」墨書土器は役所に関わる遺物として捉えられる。出土した遺跡や遺構と古代の役所との関係を考える上で、貴重な資料である。

武蔵国から出土した主な「厨」墨書土器を第62図並びに第22表に集成した。13例中10例が埼玉県内の事例である。

これまでに知られている「厨」墨書土器は、土師器や須恵器である。灰釉陶器の「厨」墨書土器は武蔵国内では初出例となり、全国的にも稀である。

「厨」の墨書は、容器として使用する正位の状態で視認できない底部外面に表記された事例が多い。そのため、食器の管理・保管に係る標識機能が意図されたと考えられる。

埼玉県内では、「厨」墨書土器が入間郡家所在

地として有力視される川越市霞ヶ関遺跡や、高麗郡家と関わる日高市拾石遺跡から出土している。

天神峯遺跡出土の「賀厨」墨書土器の「賀」の意味が注目されるが、霞ヶ関遺跡や川越市古海道東遺跡出土の墨書土器には「入厨」と表記されている（第62図3・4）。両遺跡とも入間郡に所在することから、「入間郡の厨」を意味すると考えられる。同様に郡名を伴う「厨」墨書土器は比較的多く、関東地方だけでも40例近い出土例がある（大川原2008）。

天神峯遺跡出土の「賀厨」の「賀」も郡名を示す可能性が高い。「賀」が示す候補として、武蔵国北部の「賀美郡」が挙げられる。しかし、天神峯遺跡は高麗郡ないし入間郡に属していたと思われる。「賀」が「賀美郡」を示すと仮定すると、他郡の郡名を伴う「厨」墨書土器が具体的にどのような経緯をたどって、本遺跡にたどり着いたのだろうか。一つの考えとして、国司の内部巡行等に伴い、他郡の厨から移動した可能性などを想定することができる（山中2003）。しかし、天神峯遺跡の場合、古代の役所と直接的にかかわりをもっていた状況は想定しがたい。そのため、さらに複雑な経緯を経て搬入され可能性が高いと思われる。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
上野真由美・細田勝 2011 『新田東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集
大川原竜一 2008 『霞ヶ関遺跡出土の「入厨」墨書土器について』『論叢古代武蔵国入間郡家—多角的視点からの考察—』古代の入間を考える会
柿沼修平・藤井和夫・城前喜英 1999 『姥久保遺跡Ⅱ』日野新町一丁目住宅遺跡調査会
金子直行 他 2010 『縄文海進の考古学—早期末葉・埼玉県打越遺跡とその時代—』考古学リーダー18
川越市教育委員会・川越市遺跡調査会 2014 『市内遺跡Ⅱ』川越市遺跡調査会調査報告書第44集
川越市立博物館 2015 『第41回企画展古代入間郡の役所と道』
紀野自由 1997 『下布田遺跡第36地点調査概報』『埋蔵文化財年報—平成7年度（1995）—』調布市教育委員会
栗島義明 1997 『旧石器時代の概観』『日高市史』原始・古代資料編
飯能市郷土館 2016 高麗郡建郡1300年記念特別展『高麗人集結』
黒沢王忠 2008 『川越市内出土の墨書土器について』『論叢古代武蔵国入間郡家—多角的視点からの考察—』古代の入間を考える会
齋持和夫 2011a 『東原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第378集

- 劍持和夫 2011b『中尾遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第381集
 埼玉県 1954a『武蔵國郡村誌』第4巻
 埼玉県 1954b『武蔵國郡村誌』第5巻
 埼玉県 1986『新編埼玉県史』別編3 自然
 埼玉県教育委員会 2006『埋文さいたま』No.48
 笹森紀巳子 1993『第4節平安時代』『氷川神社東遺跡 氷川神社遺跡 B-17号遺跡』大宮市遺跡調査会
 狭山市 1986『狭山市史』原始・古代資料編
 東京都北区教育委員会社会教育課 1988『御殿前遺跡』
 長岡聡司 1996『最新発掘情報31川越市霞ヶ関遺跡の調査』『埋文さいたま』第25号
 日高市 1997『日高市史』原始・古代資料編
 日高市 2000『日高市史』通史編
 平野寛之 2016『高麗郡建郡過程における入間郡の関与について—高麗郡・入間郡の集落動態分析を通じて—』『武蔵國
 高麗郡建郡—入間から見た高麗郡建郡とその後—』古代の入間を考える会
 埜間孝志 1997『大寺庵寺跡』『日高市史』原始・古代資料編
 細田 勝 2013『高麗石器時代住居跡遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第403集
 細田 勝・渡辺清志 1998『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第197集
 松本尚也 1997『拾石・王神遺跡』『日高市史』原始・古代資料編
 宮原正樹編 2016『特別展高麗郡—三〇〇年—物と語り—』埼玉県立歴史と民俗の博物館
 山中敏史 2003『郡衙による食器管理と供給』『古代官衙・集落と墨書土器—墨書土器の機能と性格をめぐって—』
 山本 禎・西井幸雄 1997『山王裏／上川入／西浦 野本氏館跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第184集
 渡辺 一編 1988『鳩山家跡群発掘調査報告書第1冊』鳩山町教育委員会